
八王子市市制 100 周年記念事業

生活文化創造都市フォーラム

生活文化創造都市推進事業「八王子地域会議」
実施報告書



2018年 3月

一般財団法人 日本ファッション協会

はじめに

一般財団法人日本ファッション協会では、地域振興事業として、平成 15（2003）年度から「生活文化創造都市推進事業」に取り組んでいます。

これは、欧米から始まり、今や世界で 100 以上の都市が目指している都市モデル「創造都市=Creative City」をベースに、地域独自の文化に根差した市民の活発な創造活動こそが豊かな生活文化を育み、産業の振興にもつながるとの認識のもと推進している事業です。

今年度は、八王子市市制 100 周年記念事業の一環として、「生活文化創造都市フォーラム」を八王子市、八王子商工会議所、八王子ファッション都市協議会、公益社団法人八王子観光コンベンション協会との共催で、平成 29 年 10 月 5 日に、いちょうホール（八王子市芸術文化会館）小ホールで開催いたしました。この報告書はその内容をまとめたものです。

皆さまには、ぜひご高覧いただき、これからのまちづくりの取組みのご参考にしていただければ幸いです。

平成 30 年 3 月
一般財団法人 日本ファッション協会

目 次

はじめに	3
目次	5
開催概要	6
主催者代表挨拶	
坪田 秀治 一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事	7
開催市代表挨拶	
石森 孝志氏 八王子市長	8
第1部 オープニングスピーチ	
田辺 隆一郎氏 八王子商工会議所 会頭.....	9
基調講演	
「生活文化創造都市の可能性と八王子への期待」 佐々木 雅幸氏 同志社大学 特別客員教授、 文化庁地域文化創生本部主任研究官	14
第2部 子どもたちの意見発表	
八王子市立第一小学校 児童 八王子市立第七中学校 生徒	23
パネルディスカッション	
「人と文化の十字路、交流創造都市＝八王子への新たな挑戦」	30
生活文化創造都市フォーラム エクスカーション	
「花とみどりの八王子巡り」	51

【開催概要】

- タイトル：**八王子市市制100周年記念事業「生活文化創造都市フォーラム」
生活文化創造都市推進事業「八王子地域会議」
- 開催日時：**平成29年10月5日（木）15：00～18：00
- 会場：**いちょうホール（八王子市芸術文化会館）小ホール
（東京都八王子市本町24-1）
- 主催：**一般財団法人 日本ファッション協会
- 共催：**八王子市、八王子商工会議所、八王子ファッション都市協議会、
公益社団法人 八王子観光コンベンション協会
- 後援：**日本商工会議所、東京都商工会議所連合会
- テーマ：**「人と文化の十字路、交流創造都市＝八王子への新たな挑戦」
- 参加費：**無料
- 参加人数：**約240名

【プログラム】

主催者代表挨拶

一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事 坪田 秀治

開催市代表挨拶

八王子市長 石森 孝志氏

第1部

オープニングスピーチ

八王子商工会議所 会頭 田辺 隆一郎氏

基調講演「生活文化創造都市の可能性と八王子への期待」

同志社大学 特別客員教授、文化庁地域文化創生本部主任研究官

佐々木 雅幸氏

第2部

パネルディスカッション

「人と文化の十字路、交流創造都市＝八王子への新たな挑戦」

◆コーディネーター

八王子市 産業振興参与、八王子商工会議所 政策委員会委員

福井 昌平氏

◆パネリスト（順不同）

サイバーシルクロード八王子 会長

古瀬 智之氏

東京造形大学 教授

栗野 由美氏

八王子商工会議所 女性経営者の会 会長

北原 優香子氏

八王子ホテル旅館組合 組合長

佐藤 正太郎氏

◆コメンテーター

佐々木 雅幸氏

主催者代表挨拶

一般財団法人日本ファッション協会
専務理事
坪田 秀治

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました日本ファッション協会の坪田と申します。

主催者を代表して一言ご挨拶申し上げます。私どもの団体の名前は日本ファッション協会です。ファッションと言いますと、ファッションモデルやファッションショー、あるいは狭い意味での衣料、一般的にはそういったイメージをもたれますが、われわれの“ファッション”は、衣食住の枠を超えた生活文化全般をファッション産業と捉えて、それを振興することによって生活文化の向上を図ろうと、平成2年、当時東急電鉄を率いていた五島昇さんが日本商工会議所の会頭をされているときに、設立された団体であります。

以来、生活文化の発展のための活動を続けております。一番大きな事業は、「日本クリエイション大賞」という顕彰事業で、日本の生活文化に大きな影響を与えた人、あるいは活動に対して賞を贈っています。また、「シネマ夢倶楽部賞表彰」という、観客の目線で見た洋画邦画問わずいい映画に賞をあげようといった事業も行っています。

今日のこのフォーラムは、生活文化創造都市推進事業の一環として行うものです。これは、地域に根差した生活文化を中心にしたまちづくりを推進しようという事業です。今、どの地域も、少子高齢化、あるいは雇用の場がないなど、非常にまちづくりに苦心されております。ここ八王子も首都圏にありながら例外ではないと思いますので、このフォーラムを通じて八王子市のまちづくりの一助になればと願っております。

今日、私が一番楽しみにしているのは、子どもたちの意見発表です。この地域会議をずっと続けておりますが、ちょうど2年前、山形県鶴岡市で開催した時に、高校生が40人くらい聴衆として参加してくれました。それは、極めて画期的なことでありました。まちづくりは、大人が頭を悩ませておりますが、実は将来そのまちを担う子どもたちがどう考えているかということが、非常に重要な要素だと思っています。

今日、はじめて子どもたちに意見発表を行っていただけということで、大変楽しみにしております。

短時間ではありますが、最後までご清聴よろしくお願いたします。



開催市代表挨拶

八王子市長
石森 孝志氏

みなさん、こんにちは、今、ご紹介いただきました、八王子市長の石森でございます。本日は市制 100 周年記念事業の一つでもございます、生活文化創造都市フォーラムに、大変多くの皆さま方にご来場いただきました。私からも厚くお礼を申しあげたいと思います。

今年八王子が市制 100 周年の記念すべき年を迎えまして、先日の 10 月 1 日には、大変多くの皆様方のご臨席の元、記念式典を盛大に開催することができました。現在、120 を超える記念事業の実施をしているところでございますけれども、そのメインの事業となりますのが、「全国都市緑化八王子フェア」、ならびに八王子の八にちなんで 8 つのビジョンフォーラムを随時開催しておるところでございます。

本日のこのフォーラムは、毎年、全国各地で行われておりますシンポジウムでございますけれども、開催に当たりまして、日本ファッション協会そして八王子商工会議所の多大なお力添え、ご尽力をいただきました。心から感謝を申しあげたいと思います。

この後、八王子商工会議所の田辺会頭からのオープニングスピーチ、そして佐々木雅幸教授による基調講演、第 2 部におきましては、八王子の産業界の皆さまを迎えて、子どもたちの提言をもとに、将来の産業づくりを含めたまちづくりについて、パネルディスカッションを行っていただくことになっております。

限られた時間でございますけれども、実りの多いフォーラムとなりますことを心から祈念申しあげて、ご挨拶とさせていただきますと思います。

本日は誠にありがとうございました。



第1部 オープニングスピーチ

八王子商工会議所 会頭
田辺 隆一郎氏

たなべ物産株式会社 代表取締役会長。
日本商工会議所総合政策委員会委員、まちづくり・農林
水産資源活用専門委員会委員長、内閣府・経済産業省・
国土交通省の審議会等の委員を歴任。

オープニングスピーチ

田辺 隆一郎氏

冒頭、大変お忙しい中、大勢の皆さま方にこの会議に出席をいただきましたことを、私からも心からお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

それでは、改めまして、ただいまご紹介をいただきました八王子商工会議所会頭の田辺でございます。また、八王子ファッション都市協議会、そして本年4月に設立をされました、八王子市中心市街地活性化協議会の会長もやっております。本日の生活文化創造都市フォーラム「八王子会議」のオープニングスピーチを仰せつかりました。今、申しあげました私の立場から、この問題をお話申しあげまして、私の今日の議論の一環としていただければ大変ありがたいと思っております。時間の関係もございますので、さっそく本題に入りたいと思います。

先ほど、市長からもお話がございましたように、今年は八王子市が市制100年ということになりました。これを祝して、120を越える記念事業が行われておりまして、例年に比べますと、そういう意味で八王子のまちも活気にあふれている、現在そんな状況でございます。

しかし一方では、これからの100年に向かって、何をどうしていくのかということをしかりと考えていかなければいけない、そういう年でもあると申しあげていいのではないかと思います。そこで、次の100年に向けて、多様なポテンシャルを再編集する、その視点というのが大変重要になってくると思っております。

そこで、少しこのまちの歴史を振り返ってみたいと思います。八王子は古くから養蚕や織物が盛んなところでありました。江戸時代になりまして、徳川家康が宿駅制度として制定した五街道のひとつ、甲州街道の宿場町としてその立地というものを背景に、商工業の重要な拠点として栄えたわけでございます。

幕末から明治にかけましては、生糸や織物の集散地として大きく発展をいたしました。当時わが国の最も価値のある輸出品であった生糸は、群馬県、埼玉県、長野県、山梨県から八王子に集まり、そして横浜へといわゆる絹の道を通して広く世界に輸出をされ、わが国の産業構造の基盤を作り上げた、そのように申しあげてもいいのではないかと考えております。

1917年、大正6年、八王子町から八王子市に移行しました。当時の東京都では、東京市に続いて2番目に市制が施行されたわけでありまして、大正時代になりましてからは、織物の生産地として力を伸ばしていきました。その結果、多摩地域の中心都市として、商工業



あるいはサービス産業、また行政機能の中心都市として栄えてきたわけでございます。

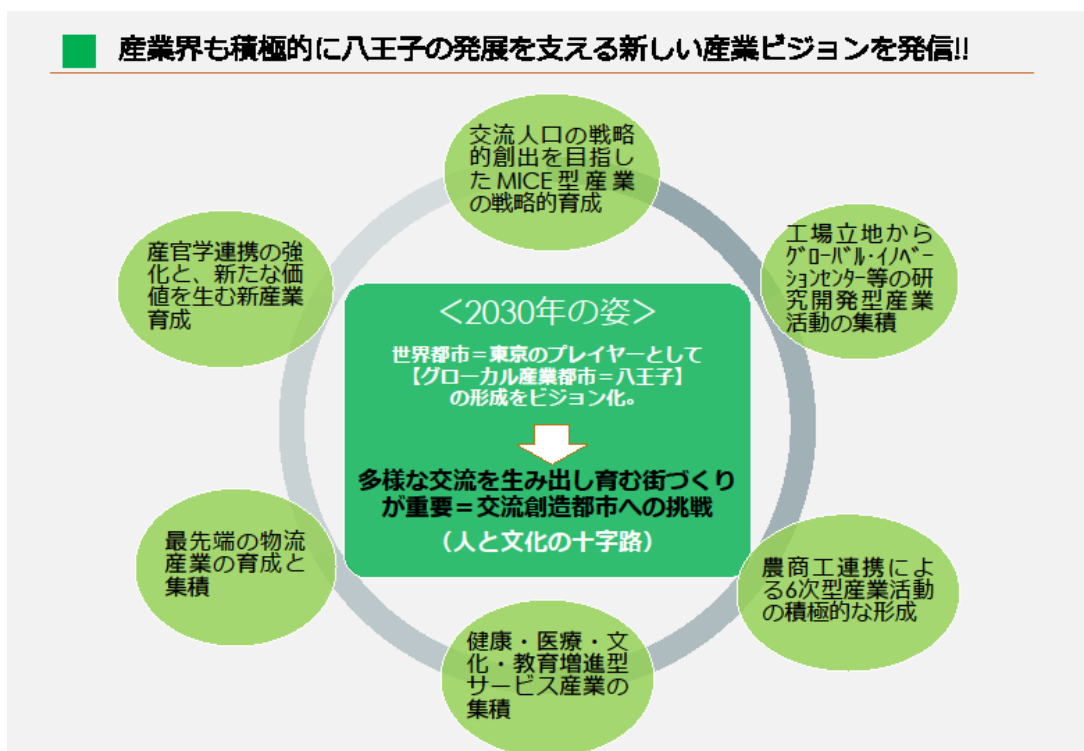
戦後になってから首都東京のベッドタウンとして人口も市域も拡大を続け、さらに昭和 30 年代の後半には、大学、高等専門学校の当地への転入が始まり、現在では 21 大学・高等専門学校を擁し、10 万人が学ぶ学園都市となっています。

そして現在、人口は 58 万人となりました。平成 27 年には中核市への移行を実現したわけです。このように、400 年からの歴史があり、それに培われた伝統文化を有し、多様な産業が集積をし、多くの高等教育機関がある、一方では緑豊かな自然環境に恵まれた多くのポテンシャルを持つ八王子でありますので、この次の 100 年に向けて、この多様なポテンシャルというものを再編集していくべきときが、100 周年を迎えたこのときではなかろうかと、そのように考えております。

そこで、わたくしども八王子商工会議所といたしましては、八王子の次なる発展を支える産業ビジョンをしっかりと持ち、発信していかなければならないと考えています。今までお話申しあげましたように、八王子には多くの魅力と高いポテンシャルがあるわけでございます。今後、これらの特色を生かし、さらなる発展振興のためには、まずは市民、産業界、行政が多面的な交流を実現させ、相乗効果を発揮していかなければならないと思っています。

八王子商工会議所は、平成 26 年、創立 120 周年を迎え、それを期して、企業の持続可能な繁栄といきいきとした幸せな市民生活の同時達成を目的とした、「グローバル産業都市八王子ビジョン」をつくりあげました。これは産業都市八王子のグランドデザインとして「地球規模で考え、地域行動する」をコンセプトとし、地域発展のためのビジョンでも考えております。

ちなみに「グローバル」とは、グローバルとローカルをあわせた造語とご理解いただきたいと思います。新しい産業ビジョンとして、6 つの括りとさせていただきます。



グローバルな研究開発型産業の集積、農商工連携による6次型産業の形成、健康医療文化サービス産業の集積、最先端の物流産業の育成と集積、産学官連携の強化と新たな付加価値を生む新産業の育成、そして交流人口を戦略的に創出する MICE 型産業の育成であります。これらのビジョンが多様な交流を生み出し育む街づくりへと発展をし、2030年の姿として人と文化の十字路となる交流文化創造都市として進化していくように、私どもは考えているところでございます。

そこで八王子が目指す、交流創造都市を実現するまちづくりプロジェクトへの挑戦について説明をしたいと思います。これは、現在、八王子が取り組んでいるまちづくりの中でも特に重要なプロジェクトであります。いくつかのものがございませけれども、時間の関係がありますので、それをすべて紹介するわけにはまいりませんので、会議所として大きく関わっている3つのプロジェクトについて申しあげたいと思っています。

一つは、中心市街地の再活性化であります。通常、まちの中心市街地とは、多様な都市機能が集積をし、また歴史、伝統文化を育んできたまちの顔であります。しかし社会経済情勢が大きく変化する中で、どのまちにおいても中心市街地の疲弊が懸念されることも、また現実であります。八王子においても例外ではなく、現在、中心市街地の再活性化をはかるべく、中心市街地活性化基本計画を作成し、国の認定を受けるべく努力をしているところでございます。この基本計画では、甲州街道沿道と JR 八王子駅の周辺、約 115 ヘクタールをそのエリアとしておりますが、そのすべてを一時期に手掛けることは不可能だと考えています。

したがってまず、中心市街地の活性化の成功モデルを創り出すために、西放射線 U ロードを中心とした中町エリア、この中町エリアを「歴史伝統文化を感じられるまち」へ再生させていくことに挑戦していきたいと考えております。この成功モデルを示すことで、その周辺に波及効果をもたらすことが期待されております。

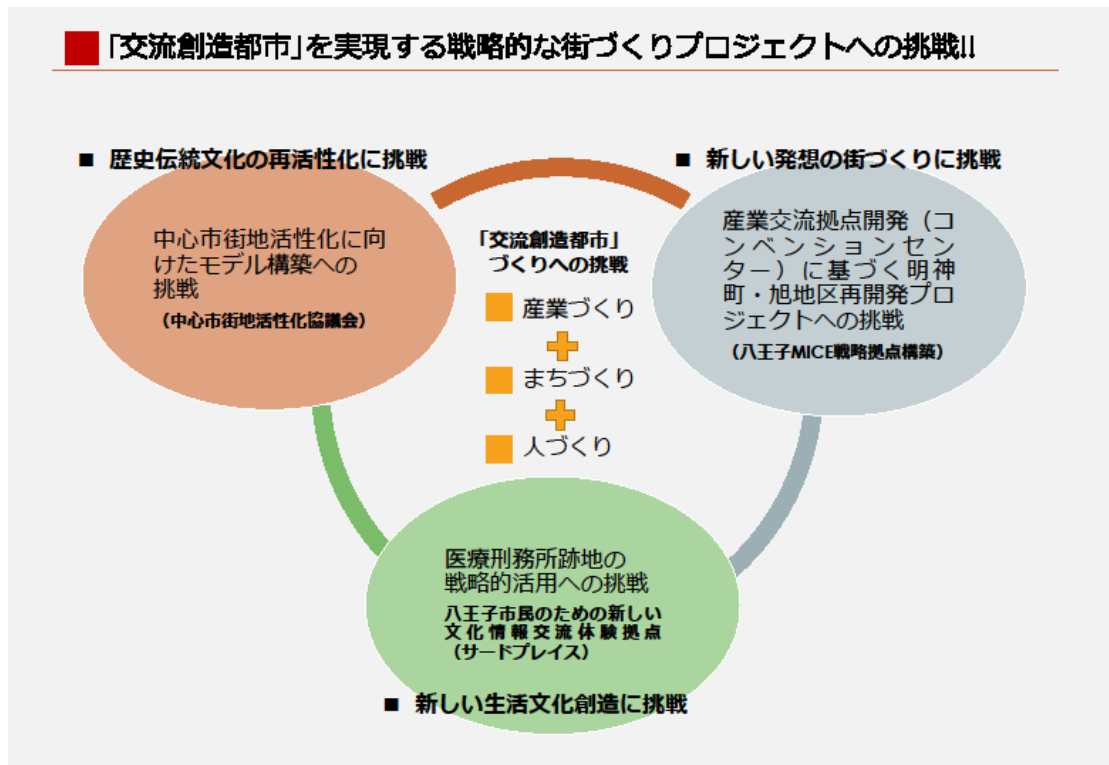
次に、八王子の東側に東京都の産業交流拠点の整備計画と併せて、明神町・旭地区の再開発プロジェクトを計画しております。JR 八王子駅と京王八王子駅を結ぶこのエリアの再開発は、八王子のまちづくりにおいて最大にして最後のチャンス、そのように考えております。産業交流拠点には、2500 m²のコンベンションホール、大小の会議室が計画をされております。それに呼応して、既に動き出しました八王子の MICE 戦略と併せてにぎわいづくりに大変重要なエリアとなりますので、八王子の新しいシンボルづくりの実現に挑戦をしていきたいと思っております。

そしてもうひとつが、平成 29 年度中に移転を予定しております、JR 八王子駅南口にあります八王子医療刑務所の跡地の活用であります。八王子市では、市民のために新しい文化、情報交流体験の拠点として家庭や職場と異なる第 3 の居場所、サードスペースの提供を目指す素案をまとめました。商工会議所としては、さらに一歩踏み込んで、市民が健康で暮らすため、そして市民のコミュニティをつくっていくための、都市型生活文化を享受できるヘルシーパークを提案しました。その中に導入すべき機能として、脈々と続いている八王子の都市文化や伝統産業の歴史など、体験・継承・保存できる都市文化伝承館の創造を提言いたしました。

これらのビッグプロジェクトの目指す成果は、交流人口の拡大による地域経済やまちの活性化であります。私は常々申しあげておりますけれども、まちづくりというのは、行政だけ

で行うものではないと思っております。官と民とが協働してこれに取り組んでいかなければなりませんし、さらにこれに必要だと思っておりますのが、未来を見据えたプラン作り、これが備わっていなければいけない、そのように思っております。それには、商工会議所としても民間の英知を結集して、持続可能なまちづくりに挑戦を続けてまいりたいと思っております。

以上、生活文化創造都市フォーラム八王子会議のオープニングスピーチとさせていただきます。ご清聴いただきましてありがとうございます。



基調講演

佐々木 雅幸氏
同志社大学 特別客員教授
文化庁地域文化創生本部主任研究官

金沢大学経済学部助教授等を経て、1992年同大経済学部教授、ボローニャ大学客員研究員。2000年立命館大学政策科学部教授。2003年大阪市立大学大学院創造都市研究科教授。2007年同大都市研究プラザ所長。2014年4月より同志社大学特別客員教授、大阪市立大学名誉教授、文化庁文化芸術創造都市振興室長。2017年より文化庁地域文化創生本部主任研究官
著書『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』など

生活文化創造都市の可能性と八王子への期待

同志社大学
特別客員教授
佐々木 雅幸氏



皆さんこんにちは。ご紹介いただきました佐々木です。八王子市の100周年の素晴らしい年に、このような記念すべきシンポジウムを開催いただきまして、ありがとうございます。

今日の話は、私が進めております創造都市の世界的な流れをご紹介して、先ほど会頭が言われました八王子市の将来プランにどのような味つけができるかということ、みなさんと一緒に考えてみたいと思い、そのための素材をお持ちしました。

7月にこちらにまいりまして、市内をいろいろ見て回ったのですが、その後で、今年は八王子まつりが大変な盛り上がりを見せたということを知りました。それからまた今年、都市緑化フェアがありますね。さまざまなお祭りがあり、そして新しいイベントがあり、この後には、子どもたちの意見発表もあるとのことですが、皆さんは、創造都市について、どのような思いを抱いているのでしょうか？

八王子の産業についてもいくつか見せてもらったのですが、やはり近代産業として発展し

てきたときの中心となったのは、織物ですね。織物の長い歴史の中でさまざまなノウハウが集積をしてきたということは間違いがなく、特に日本で最初にネクタイの開発に成功されて、「マルベリーシティ」という独自のブランドをおつくりになっているということで、これはやはりすばらしい歴史をお持ちです。八王子織物工業組合に行きまして、織物の歴史を見て、ああ八王子は日本のいくつかの繊維産地の中でも、やはり有力な都市であったのだなということを改めて思いました。八王子 100 年のロゴもなかなかユニークでおもしろいと思います。

それから先ほどの会頭のお話の中に、中心市街地を保存し、文化を活かすというお話がありました。今も芸者さんがおられる、黒塀のエリアですね。全国の繊維産地は、最盛期には大きな花街があって、旦那衆、あるいは町衆の方が楽しむ、そういう場所であったと思います。現在はどんどん縮小してきてはいるのだけれども、しかしなんとかそれを再生の一つの手掛かりにしようという運動があって、今回のまつりの中にも、にわか山車という芸者衆が乗った特別の山車が出ているということで、こういったものはどんどん発展していくと言いますか、都市の個性に将来なっていくと思います。

それからオリンパスの技術歴史館「瑞古洞」にも行きました。オリンパスは私も学生時代に使っていましたけれど、「オリンパスペン」というコンパクトカメラで、「瑞光（ズイコー）」という名前のレンズを搭載していました。その企業が研究センターをお持ちになっている。そういった意味でのハイテクの要素もありますね。

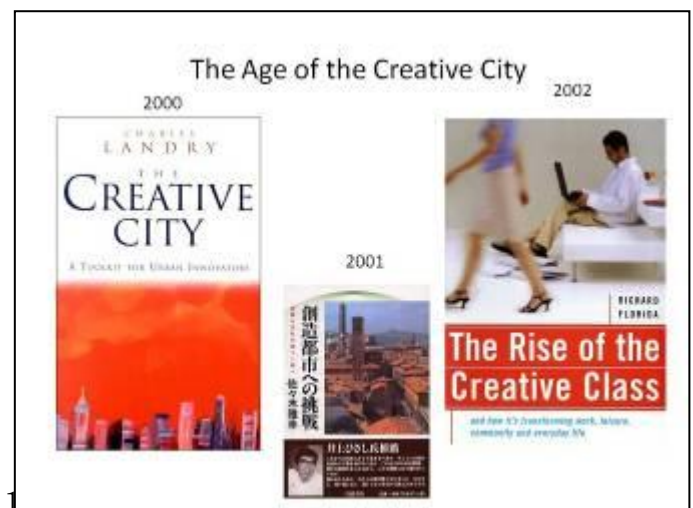
東京都心から大学がどんどん八王子に移転しましたので、私も学会の度に大学には行ったことがあるのですが、八王子のまちは素通りしてしまうということがありました。

八王子祭りというのは、大学とも呼応してやっているということで、こうしてみると八王子にはさまざまな資源がある。さきほど会頭は再編集する必要があるとおっしゃっていましたが、まさにそのとおりで、こういったところをどのように世界の流れの中で、もう一度再編集していくかということについて、少し私のアイデアを申しあげたいと思います。

それで、今回のテーマが「生活文化創造都市」ということもあって、私は岩波の現代文庫で『創造都市の挑戦』という本を出しております。これは高校生でも読めるように書いていますから、またお時間がありましたらぜひ目を通していただきたいのですが、要はこれからの都市は市民一人一人がクリエイティブに働き、暮らし、活動する都市であると、これを目指すというわけですね。

今、働き方改革が政府の大きなテーマになっていますが、わたくしは“オペラ”のように働くのだと常々申しております。その意味は後でご紹介します。

生活文化の豊かさのポイントは、市民の創造性をどんどん引き出していくこと。そこから新しい産業や文化が生まれてくるので、創造の場を都市の中にいっぱいつくっていくことが大事になります。ハードのプランも大事なのですが、そのハードを整備した中にど



のようにしてソフトな創造の場をつくるかということに、集中していただきたいと思っています。

この考え方は、世界ではちょうど西暦 2000 年、21 世紀の初頭に「クリエイティブシティ」という本が出ました。イギリスのチャールズ・ランドリーさんという方が書いたもので、それから 2002 年には、アメリカでリチャード・フロリダという方が本を出した。ちょうどその間の年に、私は「創造都市の挑戦」という本の初版を出しました。

これらの本の中で、何が語られているかと言いますと、ランドリーさんは、ときどき洗濯屋と間違われるのですね。町の中にランドリーがたくさんあるので。洗濯の「ランドリー (laundry)」とは英語のスペルがちょっと違います。彼は u が入っていないので、LANDRY です。彼は、まちの中にクリエイティブな場所「creative milieu」をいっぱいつくっていると、そこで全く思いがけない発想がどんどん生まれくる、それを英語でセレンディピティ (serendipity) と呼んでいるのですが、そのセレンディピティが生まれる場所を意識的につくっていくことが大事だということを申しました。

そして彼の考え方をイギリスの政府が採用いたしまして、クリエイティブ・インダストリーという言葉をつくりました。それには 13 業種あるのですが、例えば音楽、舞台芸術・映像といったような芸術から、デザイナーズファッションあるいはアンティーク、美術工芸品ですね、こういったものまで含んでおります。これをイギリス政府は 2000 年ぐらいから熱心に育てまして、そしてその集大成として 2012 年のロンドンオリンピックを迎えたわけです。

今、東京オリンピックを目前にして、文化庁や内閣府はオリンピックというのは、スポーツだけの祭典ではないよと言っています。もともとクーベルタンというフランス人の男爵が近代オリンピックを復興したときに、オリンピック憲章を定めています。これにはスポーツと文化と教育が融合した祭典であるということが書かれていまして、最近のオリンピック開催都市の選定に当たっては、必ず文化プログラムというものの提出が義務付けられています。期間中のみならず、前の大会から次の大会までの 4 年間に文化プログラムを集中的にやりましょうということが書かれているのです。

調べてみると、ロンドンオリンピックのときは、ロンドンのみならずイギリス全土で、アートプロジェクトが 17 万件とか、18 万件とか実に数えきれないほど行われていました。それがオリンピックの成功に結び付いたと言われておりますし、今、ロンドンの方がニューヨークより元気だと言われているのは、そういうことを背景にしています。

さて、アメリカではリチャード・フロリダという学者が出てまいりました。この人はフロリダ生まれではなくて、ピッツバーグ生まれです。ピッツバーグやデトロイトというのは、かつてはアメリカの重工業の中心地でした。製鉄業がピッツバーグ、そして自動車産業がデトロイトでした。しかし皆さん、数年前にあのデトロイト市が倒産しました。どんなにランプさんが頑張ろうと、アメ車は売れないですね。これは消費者のトレンドに合っていない。古いものづくりから脱していないからです。そこでフロリダは、これから新しい産業が興る場所には、どういう特徴があるかということ調べてみたわけです。調べてみた結果、とてもおもしろいことがわかったのですね。

どういうことかということ、ゲイ、レスビアン、同性愛者が多いと、どうもハイテクの技術者が多らしいということがわかりました。その代表例はサンフランシスコです。アメリカ

で一番ゲイがたくさん住んでいて、ゲイ同士の結婚が認められた最初のまちがサンフランシスコです。このサンフランシスコのサンフランシスコ湾を下っていった先に、シリコンバレーがある。シリコンバレーのハイテクの技術者とサンフランシスコを中心にしたゲイ、レスビアン、実はゲイ、レスビアンというのはアーティストが多いのですね、この人たちが一緒になって新しい文化や、新しいiPhoneといったような製品、アイデアを生み出したということを見つけた。以来、世界でゲイ、レスビアンに来てもらうまちづくり、まちづくりの中心にゲイ、レスビアンが来てもいいよというようなメッセージを出すところが増えてきました。

例えばアジアでは、もっともそういったことに敏感なのがシンガポールです。いきなり八王子でゲイ、レスビアン集まっていいよというと、ちょっと語弊があると思いますが、八王子の場合は漢字の“芸”にしてしまって、芸者さんでもいいかもしれません。芸者さんがたくさんおられるところに新しい産業が生まれる、あるいは新しいアイデアが生まれるということでもいいかもしれません。そういう文化というものが、クリエイティブなアイデアをもった人たちを惹きつける、創造人材を惹きつける、こういうまちづくりをしなければいけない。今、お話したことを1枚の表にまとめてみました。

要は、20世紀のものづくりというのは、フォード自動車会社で確立した大量生産・大量消費で、自動車工場働いている労働者の給料で自動車を買ってしまうということが、ポイントだったのです。なので、規格を統一して一つのモデルで大量にものをつくる、その技術が進んだので、大量流通で都市も大都市、そして工場も大きな工場が作られた。

しかし、今、その流れはどんどん変わってきています。大量につくったものは、消費者のニーズに合わなければ全然売れません。大量在庫になる。長らく消費不況で、若い人たちが車を見向きしないという現象になってしまっている。つまり、市民の消費の形が変わったのです。非個人的な大量消費から個人的な文化消費に変わっていくのです。消費というものに、何かしら文化的な価値がある。あるいは文化的な印がある、シンボルがある。

具体的に言いますと、たとえばナイキという会社がシューズをつくる。スポーツシューズですね。このスポーツシューズはナイキのマークが一つあるだけで、倍の値段で売れるわけです。人々はスポーツシューズの機能を消費しているというより、むしろナイキのシンボルを消費している。シンボル消費という状態、これが成熟社会の特徴です。そうなると、都市の競争というのは、いかに効率的に大量にものをつくるかではありません。むしろクリエイティブな人たちが集まってきて、クリエイティブなアイデアが生まれてきて、そこからどんどんおもしろい産業が生まれてくるという構造をつくる。ですから八王子にシリコンバレーのような、新しいハイテクバレーが生まれてくるのが一つの目標になっていいのか

工業経済から創造経済へ		
	工業経済	創造経済
生産システム	大規模生産 トップダウン	フレキシブル生産 ボトムアップ
消費	非個人的大量消費	個人的文化的消費
流通・メディア	大量流通 マスメディア	ネットワーク ソーシャルメディア
優位性	資産・土地・エネルギー	クリエイティブ人材 知恵知識・文化芸術
都市の形	産業都市	創造都市

もしもね。

創造都市という流れは、実は、今、世界に広がっています。ユネスコというと世界遺産が有名ですが、世界遺産だけではないのです。現に今、振興している文化産業、これを発展させようということで、ユネスコが世界に創造都市のネットワークをつくっています。

これが 7 つのジャンル「Crafts & Folk Art」「Music」「literature」「Design」「Gastronomy」「Film」「Media Arts」から 1 つを選んで都市が申請をいたしまして、認められれば、

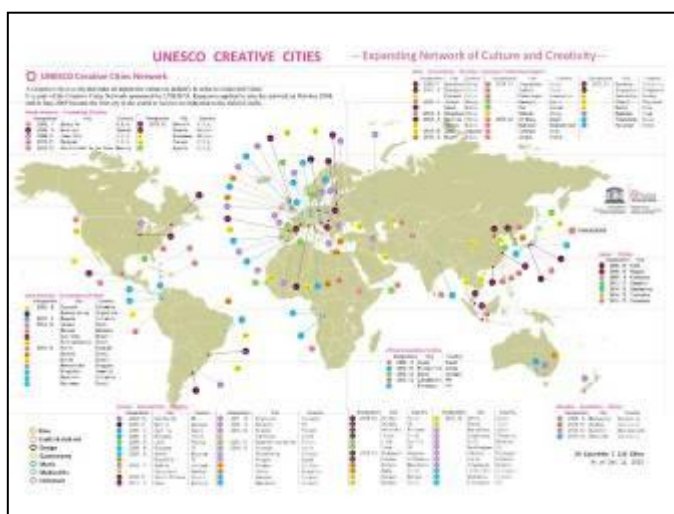
ユネスコのネットワークに入るということになるのですが、既に 72 ヶ国 180 の都市がそのネットワークに入っております。日本でも 7 つの都市が入っています。

イタリアの創造都市で、私がかつて留学していたこともあるボローニャというまちのことを少しだけお話したいと思います。

ボローニャというまちは、イタリアの中部にありまして、職人的なものづくりが今でも盛んです。まちの中心に、古い大学ですが、ボローニャ大学というものがあまして、まちじゅうに学生が住んでいます。学生が街の中に住めるように、下宿をまちじゅうに貼りめぐらしたので、それがおもしろい独特の景観をつくっています。また、大学の本部の目の前に古いオペラハウスがあります。このオペラハウスは、ヴェルディやロッシーニも活躍した由緒あるオペラハウスです。

まちのあちこちにある古い宮殿を次々と改装して、子どもたち用の図書館や、児童絵画展などが行われています。ものづくりはどうかというと、フォード型の大量生産ではなく、イタリアの伝統的な職人の技を生かした少量の高付加価値生産になっています。例えばまちの中に職人が住んでもものづくりができる地区を指定しています。そしてそこに工房がたくさんある。たとえばわたしの友人のマルコさんは、ジュエリーをつくっています。オペラハウスの横で、バイオリンをつくっている職人もいます。リトグラフをつくっている人もいます。

こういう職人たちは、ボローニャでは“オペラ (opera)” をしていると言われていています。オペラハウスのオペラではなくて、一人前の職人が自分のアイデアでものをつくるということがオペラです。普通は音楽の作品のことをオペラと言いますが、イタリア語ではオペラというのは仕事を指します。だれかに指図されていやいややらされることには“ラヴォラーレ (lavorare)” という別の言葉が



ユネスコ音楽都市・ボローニャ

「創造都市」ボローニャの挑戦

- 中小企業主体のフレキシブルなネットワーク型経済
- 職人企業を軸にした充実した支援システム
- 樹大量生産の「職人的ものづくり」
- 職人工房と町並み保存
- 芸術文化と福祉の担い手としての非営利組織(協同組合)
- 環境再生とサステナブル・シティ



あります。奴隷がやることです。

この“オペラ”は先端的なものづくりにも活かされる。実は、ボローニャの周辺はイタリアを代表するスーパーカーの産地です。ランボルギーニ、フェラーリ、オートバイのドゥカティ、これらは全部ボローニャ市内やその周辺にありまして、日本のトヨタや日産と違うのは、1台あたりの付加価値がとっても高い。だけれども、高級車なので少ししか作らない。そうすると、部品の一点一点まで職人的なものづくりになってくる。ということで、高付加価値のものをちょっとだけつくって回っていくという経済に脱皮しております。

ボローニャはオペラのまちと言われていています。みんなと一緒にやるということの意味する「co-opera」という言葉があります。これは日本では協同組合 co-op ということですが、ボローニャにもさまざまな協同組合がありまして、保育所や老人ホーム、障害者の施設も運営する社会的協同組合が登場し、ホームレスも協同組合で自立のためのさまざまな活動をしています。つまり、オペラのように働くということがポイントです。

このボローニャによく似たまちが、日本の金沢です。ご承知のように八王子の歴史を重ねますと、前田利家が、八王子城を攻めている。そしてそのときにできたのが、この八王子のまちだと書いてあります。前田利家は、金沢にも攻め入って、そして金沢城をつくりました。この八王子と金沢はちょうど戦国時代には、そういうつながりがあったのだと思います。

現代は、金沢はこちらより人口が少ない。50万人にいていませんが、歴史都市と創造都市を二枚看板にして都市づくりをしております。その金沢の創造都市づくりのリーダーは、経済同友会の代表幹事で、酒造会社の社長さんの福光さんです。それから前の市長さん、山出保さんが20年間市長をやっておられました。私は当時金沢大学にいましたので、こういう方たちと一緒に創造都市という考え方を政策に具体化していきました。山出元市長は『金沢の気骨』という素晴らしい本を書かれています。その中で、こういうことを言っています。「金沢に際立つ個性があるとしたら、それはまぎれもなく歴史と文化だ。これを磨いて世界に発信しよう」ということを言っておられます。

先ほどの会頭のお話を伺っても、歴史文化というもののまちづくりが、八王子でも十分できる。それから金沢は繊維産地です。この繊維産地の発展は実は桐生から学んだのですね。今日は、桐生商工会議所の会頭さんも来られていますが、金沢は、羽二重を桐生から教えてもらって、そしてその後は新合繊まで発展させ、同時に繊維機械まで発展させていきました。

今、金沢の産業発展は、やはり古いままではありません。むしろ新しい発展のサイクルをどう作ろうかということを考えています。金沢市民芸術村という施設がありますが、これは山出市長がつくられた施設の中で最もユニークなものの一つで、古い紡績工場の倉庫をこわさないで、創造型のアートセンターに変えました。ただ、アートセンターに変えたわけではありません。市民がどなたでも24時間365日、演劇や音楽の練習ができる場所にしました。これは市民の間で強い要望があったからです。

なぜ夜中か、昼間はみんな働いています。夜になると何かしたいという思いがあって、真夜中になると急に元気になる人がいっぱいいますよね。実は、人間の精神活動のピークは大体真夜中なのです。真夜中にもものを創造するというのは、とても合理的なことなのに、そういう施設が実はないのですね。文化施設の多くは、真夜中は閉まっています。

そこで、市民芸術村は、日本で初めて1年365日、1日24時間まったく眠らない施設にな

りました。夜は誰が管理するか、市民のボランティアが管理する。こういう施設がうまくいきましましたので、今度は都心に現代アートの美術館をつくることになりまして、この美術館は、さすがに 24 時間開いているわけにはいきませんが、夜遅くまで市民が楽しめる場所にしようということになりました。特に現代アートを金沢のまちの中心に入れる、これは伝統的なものばかりを見せていると、21 世紀を担う子供たちが、古いものしか知らない、今世界で起きている最先端のアート、あるいはテクノロジーがどういうものかということを経験できないといけないということで、あえて伝統の町の中心に、21 世紀の現代アートの美術館をつくりました。

これは結果的には大成功でした。私は、これのマスタープランまで関わったのですが、子どもたちに最先端のアートやテクノロジーを経験させるということがどんなに大事かと考えていました。実はこの周辺にたくさんの伝統工芸のお店やミュージアムがあります。金沢は都心の中で歩いて回れる博物館クラスター、ミュージアムクラスターが出来上がっているのです。21 世紀美術館ができ、北陸新幹線が開通して以来、もともとこの美術館は年間 150 万人くらいの入館者がいましたが、これが今、2.5 倍に膨れ上がっています。世界的にみてもすばらしい状態になっています。

さらに、実は金沢も八王子と同じように、たくさんの大学があるのだけれども、大学はほとんど郊外にあって、まちなかに学生たちが集まる場所がない。学生たちが昼間、まちの中にいない、これをなんとかしようと、学生がたまる場所をつくろうということになりました。都心にちょうど使い道がはっきりしなかった古民家があって、それを市が買い上げて、「学生のまち市民交流館」にします。そしてそれだけではなく、「金沢 学生のまち推進条例」という条例までつくります。学生たちが集っていろいろなことができる、交流ができる居場所をまちの中につくっていくというものです。

八王子が交流創造都市を目指されるとしたら、大学に通っている学生たちと市民が交流する条例や施設をつくるのが求められると思います。

金沢では、こういう中から、クリエイティブ・ツーリズムという新しいツーリズムが出てきました。ホテルのコンシェルジュと協力して、まちの中に住んでいる工芸作家や現代アートの作家のアトリエを回って、場合によると、海外から来た富裕層が作品を買って帰れるような形のツーリズムにまで、今、発展しております。

美術館では、地元の伝統工芸の方々を未来に向けた工芸作家に育てあげるべく、「工芸未来派」というイベントがあり、3D プリンターを使った新しい工芸をつくっていくという工芸フェアに取り組んでいます。

言い方を変えますと、これからのまちの発展は、文化がインフラになるということです。従来はハードの基盤、道路や空港がインフラだったわけですが、これからは文化がまちのインフラになる。そこから新し



い産業が生まれてくるということになります。

さて、もう時間が限られてきたのですが、八王子のシルクは横浜から世界へ輸出されていきました。この横浜が、金沢と並ぶ日本の創造都市の二つのリーダーであります。横浜は2004年から「創造都市・横浜」という事業を進めていまして、都心で使われなくなった銀行や倉庫をアート施設に変えました。クリエイティブな産業が集まるようなさまざまな条例や制度をつくり、さらには黄金町という青線・赤線で名高かった、風紀のよくなかったところをアートの力で再生するという取り組みをし、現在、横浜は、現代アートの世界的な祭典「ヨコハマトリエンナーレ」に取り組んでおります。つい1週間前に私も行ってきましたけれども、これはそのトリエンナーレの代表的な作品です。世界で今、難民の方が増えています。その難民が使っていたライフジャケット、そしてこの奥にあるのはそのボートです。こういったものを現代アートは取り上げて、今の社会の在り方を問いかけるような展示をしております。

日本の創造都市の動きとして、「創造都市ネットワーク日本（CCNJ）」、最新では96自治体が参加しているネットワークがあります。日本ファッション協会も参加し、東京都では豊島区が入っておりますが、ぜひ八王子市にもご参加いただきたいと思います。

最後になりますが、多様な文化と産業の交流から創造性が生まれます。新たな100年に向かって、八王子の創造都市としての展開を期待しております。

どうもありがとうございました。



第2部

子どもたちの意見発表

コーディネーター

福井 昌平氏
八王子市 産業振興参与
八王子商工会議所 政策委員会委員

株式会社コミュニケーション・デザイン研究所 代表取締役。
イベント学会副会長、CIプランナー、2005年日本国際博覧会チ
ーフプロデューサー、ミラノ国際博覧会日本館総合プロデューサ
一等を歴任

発表

八王子市立第一小学校児童
八王子市立第七中学校生徒

王子市立第一小学校児童／第七中学校生徒による

子どもたちの意見発表

コーディネーター
福井 昌平氏



福井 ここからは「人と文化の十字路、交流創造都市＝八王子への新たな挑戦」をテーマに、ディスカッションさせていただきたいと思うのですが、市制 100 周年記念事業の中で、ビジョンフォーラムというのは、今回が 5 回目になります。このビジョンフォーラムでは、大人たちの意見だけで物事を進めるのをやめようと、できるだけ未来の市民である子どもたちにもビジョンフォーラムに参加してもらおうと、市長さんをはじめとする推進チームが、かなり堅い決意で検討していただきました。そこで、パネルディスカッションの前に、将来の八王子の市民となる子どもたちが、八王子のまちづくりや産業をどのように考えているかを発表していただくということになりました。

今日は、二つの発表を予定しています。一つは八王子がファッション都市運動を進め始めて約 20 年経ったわけでありますが、その中の一つの事業に「花と緑のまちづくりフェア」があります。毎年 4 月に開催され、今年でちょうど 20 回を迎えた、八王子のいろいろな市民が参加する春の活動の一つであります。その中で、12 年間連続でこの事業をコラボレーションし、さきほどの佐々木先生のお話の co-operation を進めてきたのが、市立第一小学校の子どもたちです。そこで、市立第一小学校の子どもたちがまちづくり活動を通じて、どんな八王子にしたいと思っているか、しっかりと答えた結果を発表させていただきたいと思います。

それからもう一つは、学校を挙げて八王子の産業というものを子どもたちと一緒に考えようということで、市立第七中学校の校長先生の発議で、学校全体で八王子の産業をどんなものにしたいのかということテーマに、ワークショップを実施しました。今日はそのワークショップに参加した第七中学校の生徒たち12名に来ていただいています。この中から大きな3つの八王子の産業像を語っていただこうと思っています。これはすべて12人の子供たちが議論をしてまとめたものであります。よろしく願いいたします。

八王子市立第一小学校児童による 「花と緑のまちづくりと八王子の未来」

それでは、まず第一小学校の子どもたちが、ファッションタウン運動の花と緑のまちづくり運動に関わりながら、どんな八王子にしたいのかということをもとめた内容を紹介させていただきます。本当は本人たちにやってもらいたかったのですが、さすがに小学生でして、この時間にこの舞台上がるのが難しいということで、私が替わって発表させていただきます。

今年の4月で、第一小学校の生徒たちは12年連続して、この事業に関わってきました。子どもたちの仕事は、シンボル花壇やハンギングバスケットを制作することで、JR八王子の駅前のシンボルロードの花壇の育成もやってくれています。まさに先ほどのco-operationをやっています。12年間ですから、当時の6年生はもう24歳ですね。小学校の4年生から関わっていますから、その子でも22歳になっているので、立派な市民の年齢というわけです。

その子どもたちに、花と緑のまちづくりを通した八王子の未来の希望とは何なのという問いかけをしました。43人の子ども達が自分で書いて、答えてくれました。八王子の100周年記念事業のスローガン「100年の彩りを次の100年の輝きへ」と書いた子どもたちが4、5人いまして、ちょっと広告宣伝が行きすぎたのかなと思いますが、それ以外は私もびっくりしたのですが、3つの内容に大きく分かれていました。

一つは、『花と緑がいっぱいで自然が豊かな八王子』、そういうものにしたいと答えました。もう一つは『花と笑顔があふれる楽しい八王子』、これも13名いました。それから『平和でみんなが仲良く住みやすい八王子』にしたいでした。これは、私も集計を見てびっくりした

のですが、まさに世界的なフロリアードと言いますか、花と緑の都市緑化のスローガン「窓辺に花を、まちに緑を」という国際的な運動のコンセプトを表しているということで、恐らく誰も言ったわけではないと思いますが、こういう気持ちで子どもたちがまちづくりに参加しているのだなと思って、非常に感動いたしました。



八王子市立第七中学校生徒による 「八王子の産業、未来への期待」

福井 それでは次に、第七中学校生徒のみなさんに発表をお願いしたいと思います。
先ほど言いましたように、第七中学校には全校挙げて取り組んでいただきました。
ワークショップに参加したのは、中学2年生の12名であります。テーマは「八王子の産業、
未来への期待」というものです。今日は、3人の発表者に来ていただいています。前原一輝
君、萩野汐里さん、伊藤葉弥さん、この3人に発表していただきたいと思います。



皆さんに八王子の中で、どんな産業のイメージを持っているのか、自分の住んでいるまちの産業がどのようになってほしいのかということ、いろいろ議論していただきました。

先ほど言いましたように、テーマは「八王子の産業、未来への期待」ということなのですが、3グループに分かれて、まず自分と産業との関係を考える。こういう議論をしていただきました。次に自分が働いてみたい産業、革命を起こしてみたい産業はどんなものがあるのか。そして最後に自分が暮らす八王子という地域をよりよいまちにしていくために、どんなものが必要なのかということ、議論していただいたのです。

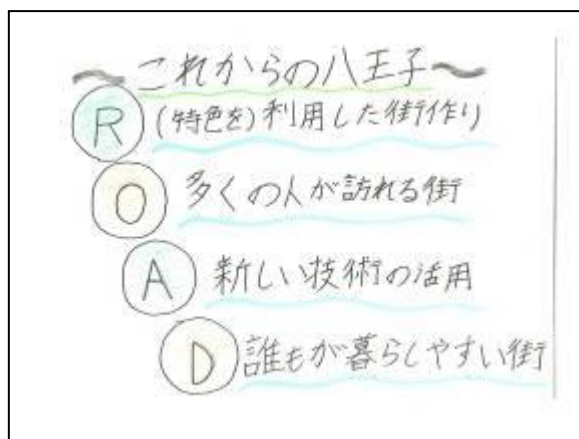
その結果、大きく3つのアイデア、考え方にまとめられました。これを今から発表していただくと思います。それでは、前原君から説明をしていただけるといいなと思います。

それぞれ自分の発表を用意していただいたのでお願いいたします。

前原 私は「八王子の歩む道」というテーマで調べ、学習をしました。まず八王子の交通の歴史について調べてみました。八王子の交通の歴史として、江戸時代に、甲州街道の宿場町として栄えてきました。その後、1889年には中央線の八王子駅が開業し、その後、1967年

には中央自動車道が開通といったように、八王子市は主要な交通機関とともに成長してきた市なのではないかなと思います。

私は先日、この下調べをするに当たって恩方と南大沢に行ってきました。自然あふれる恩方と、南のニュータウンらしい都会的な南大沢の姿を見て、一つ気になった点がありました。それがバスの運行量の違いです。恩方周辺のバスは、約45分間隔で次のバスが到着します。それに対し、南大沢周辺のバスは、15分間隔でバスが着き、バスの運行量に大きな差があることがわかりました。バスの運行量を増やしても乗車人数が少ない地域では、あまり意味をなさないのかなと思います。



そこで提案するのが、AIを用いたバスの運行です。これは利用者がバス停でインターフォンを押すとそこに連絡が行って、バスが利用者の元に向かってくれるというような仕組みになっています。このメリットとして、利用者が乗りたいときに利用ができたり、交通の便がスムーズになったりといったメリットがあります。このように最新の技術を利用した産業はこれからも八王子市の100年後により大きなポイントとなっていくのではないかと考えました。

最後に発表のまとめとして、「ROAD」の頭文字にまとめました。まず「R」は地域の特色を利用したまちづくり。「O」は多くの人を訪れるまち、「A」は新しい技術の活用、「D」は誰もが暮らしやすいまちです。この4つを八王子市のこれからの生かしていければ、八王子がより暮らしやすく、より身近なまちになっていくのではないかと考えます。これで私の発表を終わります。

福井 八王子の特徴を生かしていきながら、やはり最先端の交通の技術、あるいはいろいろなテクノロジーの融合で新しい交通システムをつくっていこうという提案ではないかと思えます。今年の2月だったと思いますけれども、ビジョンフォーラムのキックオフで、昨年度、小学生から八王子の夢を募集しましたところ、相模原にリニア新幹線が来るのですが、その時代には高尾山が宇宙ステーション、宇宙へ行くエレベーターの入口になるべきではないかということを提案した小学生がいました。そういう意味では、産業都市八王子というのは、新しいテクノロジーが生まれ、交通の利便性がどこにも負けないようなものとなるというのは非常に理にかなっているというか、びっくりしました。もう一度前原君に拍手をお願いします。

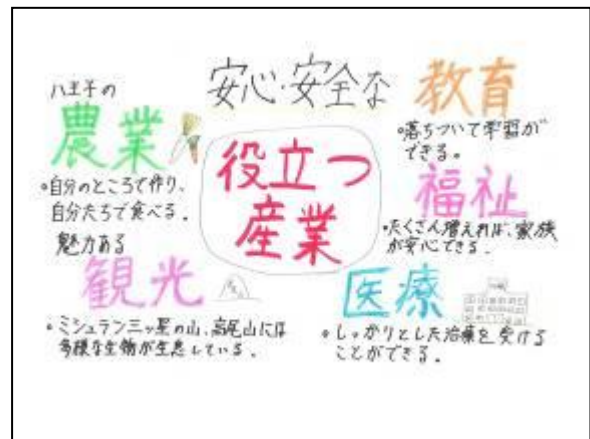
それでは2番目に萩野汐里さん、よろしくお願いいたします。

萩野 私はみんなが「安心安全で暮らしていくための産業が元気なまち＝八王子」と考えました。具体的な例としては、福祉施設や教育施設、医療施設を増やすなどです。これらを行うことによって、これらを利用している人やご家族が安心安全に暮らしていけるようになると思います。

また、農業に関しては、自分たちのところで作り、自分たちで食べる、これをこの町で広げていけたらと思います。しかし、これらを行う

にはお金が必要となってきます。そのため、観光地や野菜のアピールを行い＋ゴミ減、3Rを通してゴミを減らすことによって必要なお金を集めることができると考えました。

まちの人々全員で協力をすることによって、これらを実現できると思うので、まちの人々全員で協力をして、よりよい八王子の未来へとつなげていけたらと思います。以上です。



福井 3Rとは、リユース、リサイクル、リデュースですね。リデュースというのは減らす、リサイクルというのは使いまわす、そういう考え方を含めて言っているのですが、やはり安全安心ということが大事ということですね。萩野さんは、将来何になりたいのでしたっけ？

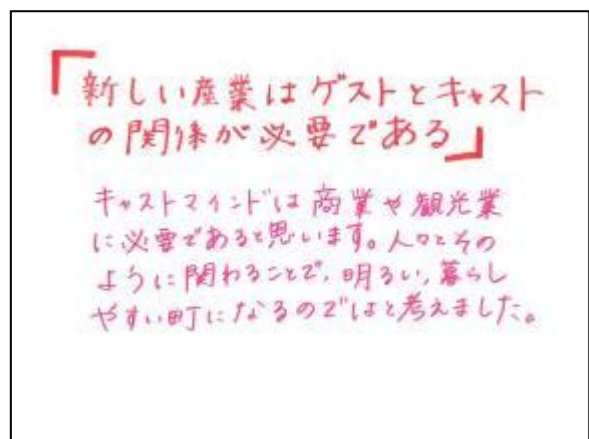
萩野 政治家になりたいなと思っています。

福井 「安全安心」というキーワードは、ずっともっているべきものですね。そのキーワードを考えていくと、八王子の地元の福祉や健康が、食品を含めて大事になってくる。八王子には江戸東京野菜というものもあります。今、道の駅でも売られています。八王子の食品の持っている重要性、そういったものに注目していただきたいと思います。持続可能なまちづくりということについて、それに関連する産業技術が、あるいは産業人が集積していく、co-operation していくべきだと、そういうふうに思います。

それでは3人目は伊藤葉弥さんですね。お願いします。

伊藤 私たちのグループは新しいサービス産業について考えました。わたしたちの考えは、趣味や訪れてきた人々をゲストとして考えることです。この考えは、八王子祭りや健康フェスタ、いちようまつりなどイベントが活発な八王子市で、ゲストとキャストの関係を持てば、八王子のアピールや生き生きとした産業に繋がるのではというものです。

例えば市役所の方は市民をゲストとし、お店



に勤めている人はお客様をゲストとして接します。ゲストにはしっかりしたいねいな接客をするのはもちろん、気遣いやおもてなしなどもできれば、よりよい産業ができるのではと思います。

ゲストとキャストの関係を築き、人を楽しくさせることができれば、八王子がより明るいまちになると思います。ゲストとキャストという、私たちの考えは、お金も時間もかかりません。それぞれが意識すればできると思います。ぜひ私たちの考えをいろいろな場所で、実践して行ってほしいなと思います。以上です。

福井 先ほど佐々木先生もおっしゃったようにハード型の社会インフラではなくて、人の持っているクリエイティビティや思い、そういったものをまちの重要な資源として活用していく。そこでまさに **co-operation** ですね、「オペラ」をやっていく。こんなイメージをやはり生徒たちも考えているのだなと思いました。もう一度、伊藤さんに拍手をお願いします。

短い時間の発表だったのですが、みなさんには大変な思いをぐるぐる回しながら、考えていただいたと思います。ですから先ほどの第一小学校、それから今の第七中学校の生徒さん達が考えたことというのは、私はかなり本質をついているところがあるのではないかと思います。これからのパネルディスカッションにぜひ活かしていただきたいなと思います。

もう一度、第七中学校の3人に拍手をお願いします。

3人にはパネルディスカッションにも参加していただくことになっています。



パネルディスカッション

コーディネーター： 福井 昌平氏 八王子市 産業振興参与
八王子商工会議所 政策委員会委員

コメンテーター： 佐々木 雅幸氏 同志社大学 特別客員教授

パネリスト： 古瀬 智之氏 サイバーシルクロード八王子 会長
株式会社コスモ計器 代表取締役

八王子市と八王子商工会議所連携のもと、地域内の豊富な資源を最大限に活用し、魅力ある産業都市“八王子”の形成に向け設立された産業活性化組織「サイバーシルクロード八王子」の会長として、農商工連携による新たなビジネスチャンスや新産業の創出に取り組んでいる。企業経営の傍ら、産業振興、小中学生への啓蒙活動を行う。(公財)日本健康アカデミー 理事長、東京高専技術懇談会副会長、首都圏産業活性化協会(TAMA 協会)監事などの要職を務める

栗野 由美氏 東京造形大学 教授 (メディアデザイン専攻領域)

形の文化会副会長、日本色彩学会・画像色彩研究会幹事、視覚情報基礎研究会会員。金沢美術工芸大学工業デザイン専攻卒業、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了 (芸術学専攻造形理論・色彩学)。exploratorium(San Francisco,USA)にて Artist in Residence。社会で機能するデザインを他学部、地域、企業との連携事業にて実践教育している

北原 優香子氏 八王子商工会議所 女性経営者の会 会長
医療法人社団 KNI 常務理事

女性経営者の会「シルクレイズ」の会長として、多くの女性経営者のパワーを結集し、新しいライフスタイルにあった生活文化産業活性化の推進役として活躍。市内で、北原国際病院・北原リハビリテーション病院・北原ライフサポートクリニック・北原 RD クリニックを展開。カンボジアの首都プノンペンにサンライズジャパンホスピタルを開設。宮城県東松島市にも東日本大震災以来医療協力を継続

佐藤正太郎氏 八王子ホテル旅館組合 組合長
佐藤株式会社 代表取締役 八王子スカイホテル 総支配人

地域の発展無くしてホテル業の発展無しとの考えから、自社の発展に力を尽くすとともに、八王子の産業とりわけ観光業に着目し、八王子ホテル旅館組合の組合長に就任以来、地域活性化に尽力。八王子観光コンベンション協会理事

パネルディスカッションテーマ

「人と文化の十字路、交流創造都市=八王子への新たな挑戦」



福井 それでは、これから『人と文化の十字路、交流創造都市=八王子への新たな挑戦』をテーマにしたパネルディスカッションを始めたいと思います。

まず、パネリストのみなさんをご紹介します。女性経営者の会「シルクレイズ」の会長で北原クリニック院長の北原優香子さん。サイバーシルクロード八王子会長で、株式会社コスモ計器取締役の古瀬智之さん。3人目は八王子ホテル旅館組合 組合長で八王子スカイホテル総支配人の佐藤正太郎さん。そしてもう一人、東京造形大学 造形学部デザイン学科教授の栗野由美さんですね。基調講演をいただいた佐々木先生にもコメンテーターをお願いいたします。

これから4人のパネリストのみなさんに、冒頭の田辺会頭のスピーチ、佐々木先生の講演、子どもたちの夢と期待、これらを経て、それぞれのみなさんの専門分野での活動に引きよせていただいて、「交流創造都市=八王子」についての持論、あるいはアイデアがあるということについて発表していただきたいと思います。

せっかくですから自己紹介を兼ねながら、お一人10分間という非常に短い時間ですが、まずリレートークをしていただきたいと思います。合間には佐々木先生からも、こんなことを追加で聞きたいということがありましたら、お言葉を挟んでいただきたいと思います。

それでは、最初に北原先生お願いします。

北原 どうも北原です。わたしは小学校の時に医者になりたいなと思っていて、医者になりました。医者になって、こういうことは患者さんのためによくないとか、業者と癒着するのはよくないということを言っていると、いつまでも中学生みたいなことを言うなと言われたものですがけれども、やはり中学生のみなさんのまっすぐな心というのは、今後も絶対に生かしていただきたいと思います。

まず、私が病院をつくった流れなのですが、そうやって文句ばかり言っているのではなくて、ではどうするのよという話です。同じような考え方の人と結婚して、自分たちで病院を4つもつくりました。北原国際病院、北原リハビリテーション病院、わたしがやっている北原RDクリニック、そして北原ライフサポートクリニックです。

なぜこんなふうがんばるのかと言われるのですが、二つの大きな目標がありました。一つは救急手術からリハビリ在宅まで一貫した医療をやること。それを分断した大学病院で、できるかという、そうはいかないのですね、脳の疾患というのは。再発予防から看取りまでやらなければいけない。一貫した医療にがんばって取り組んでいます。

もう一つが、日本の医療を輸出産業に育てることです。これを23年前に言っても、誰にも理解されませんでした。ばかじゃないのなんて言われたこともある。自分の病院がちょっとうまくいったから慈善事業でやっているのと言われたこともありますが、全然違います。これは日本に残された選択肢の一つです。

実際に、昨年9月にカンボジアのプノンペンに、とうとう夢が実現して第1号の病院をつくりました。本当に高度医療ができる病院です。野戦病院のようなものを皆さんは想像されるかと思いますが、違いますよ。本当に大手術室からCT、MRI、アンギオまで最先端のものが揃っています。カンボジアの病院は、サンライズ・ジャパンホスピタルと言います。建築は現地の方と日本との協力で行いまして、手術室のように高度な設備は、やはり日本でないとできませんでしたが、この次に作る時は、みなさんでやってよという感じで、日本が惜しげもなく技術を教えました。

病院内は、アートと植物で溢れています。アートというのは、先ほどのお話にありましたが、なくてはならないもの、なくては生きられないものです。現地の方の作品がすごく多いです。そして、椅子なども現地の方につくってもらいました。ただ、漠然と置いたのではなく、考えて考えていろいろな植物をあらゆるところに置いたのですね。カフェテラスの池には日本の鯉が丸々として泳いでいます。

検査室には、桜のマークがついたユニフォームを着たカンボジアの職員が、マルチタスクで働いています。どうしても効率的ということがなかなかできないのですよ。アメリカより日本の方が効率的だと思うのは、一人の人がいろいろなことができる、法律に反しない限り、いろいろなことをやるのですね。特にうちの病院はそうなのです。広い検査室で、一人



北原優香子氏

ひとりにマルチタスクで働いてもらって、全体で効率よくやる。このやり方など基本的なことを、100人のカンボジア人をうちの病院に呼んで、寮をつくって、徹底的に叩き込んだのです。その結果、くも膜下出血で本当に大丈夫かなと思った患者さんを、日本人スタッフとカンボジア人スタッフが諦めずにしっかりと治療して無事退院させました。



中学生の皆さんには夢があってとてもいいと思うのだけれど、皆さんが大人として活躍する2030年ごろの現実は厳しいのです。どうしてかというと、日本の人口は今、1億3000万人いるのですが、2030年には1億1600万人に減ります。1億1000万人も居ればいいと思うかもしれないけれど、そんなことはないのです。なぜかかというと、減るのが若者だから。3人に1人以上が65歳以上になる。ここが問題なのですが、全世帯の40%が一人暮らしの高齢者になる。私が医者になったころには、7.4人で一人の高齢者を支えればよかった。だから国民健康保険も、安いお金で十分な医療ができました。だけど2030年になると、肩車状態です。一人が一人を支えなければならない。そうしたら、本当にすばらしい、夢のような中学生のみなさんのアイデアも実現できるかなと思ってしまいます。本当にぐらついてしまうほどの未来なのです。

その状態を一足先に体験しているのが被災地です。うちが協力している東松島というところは、震災前に比べて、特に沿岸部では全部流れてしまって引っ越しせざるを得なくなってしまいました。それこそ家族がバラバラになって、娘や息子は孫のために他のところに移住してしまい、親せきも友達も誰もいないような仮設住宅に、まだ人がいっぱいいるんですよ。うちの職員はその仮設住宅に引っ越して、どうやったらみんなが、ただ医療だけではなくて、元気になれるか一生懸命調べました。その彼がつくった新聞の中にちょっといいことが書いてあるので紹介したいのですが、アメリカの大きな病院で同じような重症度で、同じような治療を受けた何百人かの心筋梗塞の人がいました。半年間、誰も見舞いに来なかった人に比べて、二人以上見舞いに来た人というのは、生存率が3倍になる。要するに大きな、いい設備のいい病院で完璧な医者が治療したら助かるかといったら、そういうわけではないのです。

「八王子をつながり都市に」したいと思います。やはり花と緑、美しい草花だけでも、花を見ているだけでも人は元気になるのです。病院の中に例えば桜などをよく植えているのですが、今年も桜を見ることができかなというのが、一つの日本人のポイントになるのです。桜だけではなくて、こんな花が咲いた、あんな花も咲いたということが生きる力を生むのです。

何と何をつなげ交流・創造するのか、自然と人、AIと人、癒しの空間と人、人と人などです。AIというのは絶対に必要です。というのも、みなさん大人になって、そんなに介護ばかりやってられないじゃないですか。自分たちの夢を実現しなければいけないですからね。今、それこそうちが持っている滝山というのは、昔お城があったのです。だから登るとも

のすごくいい景色です。本当に 360 度見渡せるのですけれど、そこに新しい病院をつくっています。温泉も掘りまして、果樹園や花畑、牧場などをつくっています。古い方の建物もただ取り壊すのではなく、しばらくの間置いておいて、市民の NGO、NPO などの交流の場所として使いたいと思っています。

新しい病院は、外観はお城のような感じなのですが、中身はデジタル化します。どういうことかという、例えば、今、本当に人出不足なのです。だから AI と電子カルテを結びつけて、今、発熱していますと、看護師さんが自分でマイクで言うと、AI からいろいろな指示が来る。どんな発熱ですか、その経過だったら血液培養を出して下さいなど、これはもちろん AI だけが言っているのではなくて、医者としての全体的な常識というか、標準に基づいてやることです。

ケアワーカーの方なども、今まで主婦をやっていた方と、長年のベテランの方では、お風呂の介助の仕方も違うし、ただお風呂に入ればいいというものではなくて、病院の場合は、その人がどれくらい回復しているか、何をすれば何ができるのかということ全部医学的に見ているのです。そういう情報などもすべて総合して、カルテにフィードバックする。そうすると、退院が早まることもあります。患者さんの中には、夜すごく不安になる方もいます。そういうときに縛ったり、薬を使ったりすると退院が長引いたりします。それが起きる前に看護師さんが行って、だいじょうぶですかと声をかけると全然違う。そういうことも AI でやっていって、何とか少ない人手で、そしてやさしい声掛けで回復できるような医療というものをつくっていきたいと思っています。

温泉棟もつくります。ハスの花が咲く池をつくって牛を飼う。これは既に何年も前からやっているのですけれども、とてもいい効果が出ます。

私どもがやろうと思っているのは、トータルライフサポートです。世帯数の 40% が一人暮らしの高齢者となる社会が、どういうものかちょっと考えてみてください。いくらお金持ちで、日ごろ健康だった方でも 80、90 になれば病気をします。そのとき、なんとか救急隊を近所の方が呼んでくれたとして、保険証やキャッシュカードなどは、首にぶら下げて寝ているわけではないですよ。どこにあるか、聞かなければなりません。娘や息子に連絡して、3 時間以内に何とかカテーテルで手術すれば助かるのだけれど、同意が取れなかったらそのままですよ。もしそれで死んでしまったら、うまくいかなかったら訴えられるのはこっちだから、どうしても同意がいるのです。だけどそれができない。40% が高齢者、一人暮らしということになるのだから。

あるいは配偶者の方と住んでいたとしても、いやな話ですが、老々介護や認々介護、両方とも認知症ということがあり得ます。実際にあるのです。だからあらかじめ八王子市全体で、全部登録しておく必要があります。その方が倒れて病院に運ばれたら、自分はどこまでの医療を受けたいのか、全部管でつながれて延命するのはいやだよということを登録してもらう。やった後、麻痺が残らないという可能性があるのであればやってほしいとか、登録しておくわけです。個人認証は、顔認証、指紋認証、瞳孔、この 3 つが合えばまず OK です。

その他にも先ほど、安心、安全ということがあげられましたが、農場で市民と患者さんと退院された方、家族ボランティアなどが一緒になって安全な野菜をつくるとか、あるいは例えば、自分が好きなものを食べたいという場合は、家族と一緒に食べて食べるとか、退院

した方で旅行に行きたいのだけれど、既存の温泉には入れないからいけないよという方は、うちの病院の温泉に入ってもらおう。そういうことができます。また産業としても都心から来ていただいて、ケアホテルのようなものをつくってもいいかなと思っています。でもこれは、うちだけではなくて、みなさんの協力がなければできません。

希望もあります。世界の人口が 85 億人になる 2030 年には、中間所得層の方たちが、すごく増えます。特に中間階級の 3 分の 2 はアジアで増える。だから、こういう新しいモデルを作れば、売れる。特にアジアに信頼してもらって、優れたデザイン、そしていろいろな衣食住が足りて、中産階級になったら、やはり優れたもの、アートも欲しいし、ファッションも欲しいし、トータルで一人暮らしの老後を支えるシステムも欲しいし、もちろん最低限の先端医療はみんなが求めるものです。でもその時になっていきなり行ってもうまくいきません。今、信頼を勝ち得ることが大事なのです。大切なのは仲間を信じて行動すること。がんばりましょう。

福井 グローカルだけではなくて、グローバル・グローバルのところもありますね。でも、結局、医療サービスをきちんとつなげていく、隙間をつくらない。それをつくる環境としても、八王子はすごくあるぞということですね。佐々木先生、どうですか、今の話は。

佐々木 いや、これまでの病院は、長く入院したら元気がなくなるでしょ。でもアートと緑があったら、やっぱり元気になりますよね。それは本当にすばらしい。だから、僕は安心しました。八王子に移住するかな。

福井 佐々木先生、ぜひ来てください。私もそんな感じがしてきました。八王子に住もうかな。北原さん、どうもありがとうございました。

では、次はサイバーシルクロード八王子会長の古瀬さん、よろしく願いいたします。

古瀬 サイバーシルクロード八王子会長の古瀬です。サイバーシルクロード八王子というのは、八王子市の企業支援課と八王子商工会議所が力を併せてやっている産業振興の実行部隊です。ここの会長をやっています。

本業は、八王子でものづくりの会社を営んでいます。そのかわりに、公益財団法人日本健康アカデミーの理事長をやっております、私自身の専門は小中学校に伺って、薬物乱用の防止という話をするので、市立第七中学校さんにも 2 回ほどおじゃましました。

製造業は生産性が高いということで、八王子の産業を盛り上げていくのなら、ある一定以上の製造業を中に入れてたいと思っています。年々



古瀬智之氏

製造業の割合が減っているのですけれども、それでもやはり日本の国の中で、モノを作っていくということが、結構付加価値があって、OK だよというところが残っているのですね。例えば化学や自動車関係などですね。そういうところの付加価値というのは、やはり販売業やサービス業よりやや高めで推移しています。それなりにきちんとしたお金を生むこともできるし、雇用も創出できるということで、製造業はある一定の割合でつくっていきたいと思っています。

それからもう一つ八王子の起源として、いろいろお話がありましたように、八王子というのは、東京の中でも結構大きいのですね。面積的にも東京都の12分の1ありますし、人口的には23区を除けば、一番大きい。小さめの県とほぼ同じ人口です。そういうこともありまして、八王子に製造業が多いのです。それから先ほど会頭からもお話がありましたように大学が多い。我々のような産業振興の支援をする団体もあって、クラウドファンディングも実はやっています。ここら辺のところをキーに考えています。

八王子から周辺の地域には、結構大手の会社がありまして、ここから派生した中堅の製造業も多い。私のところもそうです。そういう大手中堅を支える加工、電気、ソフトをやってくれる製造業が非常にたくさんあります。大体1500社ぐらいあります。なので、小さなことで1個2個からある程度のロットのものまでものづくりをしようと思ったらすぐにできるという、ちょっと特異な地域ですね。

次に八王子には大学がたくさんあります。八王子と隣接する市と併せると25校ぐらいあります。だから学生がやはり多い。常時11万人ぐらいの学生がいます。それから先生方もたくさんいるのですが、八王子には3000人以上の留学生がいます。八王子ではいろいろなことを学ぶことができるし、勉強している若い方もたくさんいる。それから留学生とつながると、海外とのつながりもつくれる。先ほどのようにものをつくって、あるいはサービスを輸出しようとしたときに、現地でアテンドをしてくれるような人たちとつながることができるのですね。

それから将来にわたっては、学び直しと言いますか、学校を出て社会に出て、いろいろ活動をしているけれど、まだもっといろいろなスキルを高めてさらに働きたいという人たちが、学び直しができるようになっていくのではないかと思っています。

次に、先ほども申しましたように、八王子には産業振興の部隊がありますので、いろいろな何かやっというときに、その協力をしてくれる、あるいはできる人をつないでくれる団体があります。サイバーシルクロードもありますし、TAMA 産業活性化協会もあります。

クラウドファンディングは、商工会議所が主体になってやってくれています。どういうことかという、一般の市民がネットを使ってマーケティ

八王子の資源

- 八王子は結構面積規模(東京都の1/12)が大きい、58万人(鳥取県より多い)都市
- だから、
- 八王子には製造業が多い
- 八王子には大学などが多い
- 八王子には産業振興を支援する団体がある
- 八王子はクラウドファンディングも導入した

ングなどを小さくちょっと始めたいというとき、自分のアイデアが売れるのかどうかということマーケティングしよう、あるいは資金調達する、こういうことができるのですね。クラウドファンディングのHPを開設してやっていますが、将来は、市民がいろいろなことを考えて、それを一般の人たちに訴えていく、できればそこで買ってもらって資金を調達する、そういう場に使っていったらと思っています。

もう一つ、たまたま今日のニュースでやっていましたが、明日から Google が AI を搭載したスピーカーを販売するそうです。ソニーも年内中に販売する。人工知能が今、家庭の中に入っていこうとしているのですね。それから IoT、もののインターネット化、いろいろなものがインターネットにつながってくる。製造業の中では、第四次産業革命が起こっています。人間を介さずに、いろいろな機器や工場の中のいろいろなものがネットワークにつながって、連携してものをつくっていくことになります。

それから RPA、ロボットによる業務の自動化、パソコンでいつも仕事をしているけれども、その手順をパソコンが覚えて自動的にやってくれるみたいな意味ですね。そういうことで、生活の仕方や、仕事の仕方がどんどん変わっていく時代に入ってきている。そうすると、変化しているということは、今までなかったニーズが出てくる。例えば、先ほどの北原先生のように、少子高齢化が進んでくると、医療自体が輸出産業になるのですね。新しいニーズが生まれてくる。このようなことがあります。

ところで『LIFE SHIFT』という本をお読みになった方、いらっしゃるでしょうか？ちょっと前にニュースでも取り上げられていましたが、2007年に生まれた、今年10歳になる子どもたちは107歳まで生きる可能性が50%ある。今年生まれた子どもというのは、110歳まで生きる可能性が50%あるというのですね。中学生の皆さんは、100歳以上生きるという覚悟や勇気が必要です。

例えば、私が子どものときには、

男性の平均寿命は65歳だったのですね。今はまだ、後、5、6年で死ぬという感じは全然しません。これから必要になってくる力として、長い人生を楽しく生き抜く力が必要なのです。65歳でリタイアして、100歳まで生きるだけの所得はないですよ。ということは、何らかの形で働き続けていって、生活費を稼がないといけない。生活費を稼ぐ知識とスキルを、これから学び直してつけていって、仕事をしていく必要がある。

それから長い人生ですから、健康でなければいけないし、生活も楽しくなければいけないので、そういうことに協力してくれる人たちがが必要です。さらに私が学生のころには、携帯電話はなかった。パソコンもなかった。でも今、そういうものを使って仕事をしていますよね。今、ないもの、これから出てくるものを使って仕事をする。そういう自分自身の力を身につけ、働き続けていくことも必要になってきます。ここでも、学び直しということが必要

ところで、

- 2007年生まれの今年10歳の子供は、
107歳まで生きる確率が50%ある
- 10年間で2・3歳、寿命が延びている。
- 今年生まれる子供は
110歳まで生きる確率が50%
- だから、
- 永い人生を楽しく生き抜く資産が必要
 - 生産性資産: スキルと知識
 - 活力資産: 健康・友人関係・家族などの良好な関係
 - 変身資産: 知識やスキルを学び続けて、仕事の仕方を変えていく力、チャレンジを助けてくれる人的ネットワーク

LIFE SHIFT:100年時代の人生戦略 Lynda Gratton / Andrew Scott より

になってきます。

ということはつまり、先ほど申しあげました八王子の資源や、これからの社会のニーズ、それから我々にこれから必要になってくるニーズは、一人一人の市民が主体的に地域でもって事業を起こしていく、先ほどの中学生の発表のように、主体的に地域でもって事業を起こしていくということに対して、フィットしているのですね。これを使っていく必要があるのではないかと。あるいはこういう方向に進んでいく必要があるのではないかとということです。

ということで、押さえのポイントです。クリエイティブということなのですが、ものづくりや仕事の仕方が変化していく、こういう変化に追われていくとあまり楽しくない。逆にこの変化をポジティブに考えて、新しいものづくりや新しい仕事の仕方をつくっていく。自分たちでつくっていったら、所得を得て人生を楽しく送る。それだったら、他の人が考えたことに対してそれに従事する、先ほどの講演に出てきた奴隷がやる仕事 *Lavoro*、そこまでのことではないとは思いますが、そうではなくて、やはり「仕事・作品」という意味の *Opera* でなくてはいけない。

自分で考えたものをつくっていく、自分でサービスを考えてそれを提供していく。自分で新しいものを生み出してやっていった方がいいのではないかと。それがクリエイティブというものだろうと思います。

今、若い人たちに、クリエイティブな力をこの八王子で発揮していただいて、八王子で価値が創造されていくことが、八王子の活性化につながっていくのではないのでしょうか。大人の人たちは、新しい変化を恐れずに、ポジティブにそういうことを受けとめて、新しい仕事が生まれてきたら、それを雇用の場にしていくようなことも、やっていいのではないかと。

大きな産業を興すというよりは、小さな産業をたくさん興していくことが必要なのではないかと考えています。

福井 佐々木先生のおっしゃった「市民一人一人が創造的に働き、暮らし、活動するクリエイティブシティ」を、八王子ではもう実践しているのではないかと感じですね。古瀬さんは介添え役をやっていらっしゃると思うのですが、そういう意味でいろいろな新創業の仕組みづくりが、やはりすごく重要だと思います。その辺のチャレンジは今どうなっていますか？

古瀬 サイバーシルクロード八王子では、創業されたいという市民の方に対しての支援を、今もちょうどやっているところですね。10月から11月にかけて創業支援も行っていますし、先ほどのクラウドファンディングも、小さく始めたいという方に使っていただけるように、今、整備しているところです。そういうことを併せてフィットさせていって、八王子で小さな産業がたくさん興ってくるということを期待しています。それを後押ししていきたいなと思っています。

福井 ありがとうございます。それでは、はい、佐々木先生。

佐々木 今のお話に出てきた『LIFE SHIFT: 100年時代の人生戦略』を書いた Lynda Gratton

は、僕は直接知りませんが、たぶん先ほど紹介した『クリエイティブシティ』のランドリーと同じ釜の飯を食っているような雰囲気ですね。今日の発表の中で一番素晴らしい言葉は、僕は『LIFE SHIFT』の中の「変身資産」だと思います。社会は大きく変わり、変わっていくと人生の中で何回もシフトしていかなければいけない。そうすると、変身していく力というものを持っていないと、すぐに社会に遅れます。変身資産というものをどうやって、この八王子の中で身につけていくことができるかという形でのまちづくり資産。今、たくさん大学があるけれど、まだ変身資産を学ぶ場所は少ないと思います。だから人生の中で何回も学び直してくる人たちがそこに集まるという形にしていく必要がある。同感です。

福井 ありがとうございます。では、佐藤さん、よろしくお願いいたします。

佐藤 ご紹介にあずかりました八王子ホテル旅館組合の組合長をしております佐藤です。

最初に、第七中の伊藤さんの発表に触れたいと思います。ゲストとキャストという話で、その点はサービス業をやっている私には、非常に興味深い話でした。この話を聞いて、皆さんがどう感じられたかという部分なのですが、恐らく大多数の方は、市民をゲストと考えると言われて、ゲストの立場でそういうふうにしてもらえるといいよね、と感じられた方が多いのではないかと思います。重要なのはやはりゲストの立場ではなく、われわれ全員がキャストにならないといけないと思うのです。



佐藤正太郎氏

ゲストの立場からそうなりといいよねと言っているだけでは、物事は変わらない。キャストマインドを持ったまちがいいと思うのなら、市民一人一人がキャストとして活動していくことが必要だと思います。そんなことを言われても、今の自分の仕事や立場では関係ないよという方が多いかと思うのですけれども、そういうことではなくて、今から皆さんが参加できる形の話をしたと思います。

話を最初に戻しまして、今日の私の話は、「MICE」という話です。MICEと言われても、皆さん聞き慣れない言葉だと思います。MICEというのは、「M・I・C・E」の頭文字をとって「マイス」と言います。これを聞いて皆さん、だからなんなのだと思うかもしれませんが、私も正直、これを最初に聞いたときは、「はあ」という感想だったのですが、これを大雑把に言うと、会議やイベントを誘致して、外からお客様を呼び込もうという計画になります。では、なんで今、ここで八王子に外からお客様が必要なのでしょうか。

この話のコアは、やはり人口減少にあると思います。先ほどから皆さまのお話に出ているのですけれども、例えば人口 100 人の村という話で考えます。人口 100 人の村で、お米を 10

人でつくっていました。10人で100人分のごはんを作っていましたと仮定します。ここで大げさな例ですが、ざっくりと急に50人に減ってしまいました。50人に減ってしまうと、働く人も、農家の人も5人に減ってしまいました。これが今よく言う働き不足という状態なのですが、5人に減ってしまって大変だと、でも女性を活用しようとか、定年を延ばそうとか、それこそAIを活用して生産効率を上げようとか、そういう話が言われています。そういうことで奥さんや両親を駆り出して、総出でがんばって作りました。例年どおり収穫があったとしましょう、そうすると、出来上がるのは100人分です。ところが、このままだと、村の人口は既に50人ですから、実は余ってしまいます。これが働き不足よりもっと怖い、需要不足という問題です。

100人分のごはんをどうしましょうということですが、基本的にはこれをどうにかしようと思うのなら、売りに行くか、買いに来てもらうしかないところですね。これでやっとなりに来てもらうという話が出ました。これが観光立国という話であって、交流人口を増やすということの必要性で、観光業の将来性であり、MICEの必要性だと思うのですね。

もちろん、これのもう一方の売りに行く、これができるのは、非常に有効な手段ですので、北原さんのお話にあったように、売りに行くということは、非常によいことです。ただ、買いに来てもらうということは、売りに行くよりも簡単だと、何しろ、来た時点ですでに買う気になっているので、買いに来てもらうという活動は、そんなに大変なことではないと思います。一番大変なのは、まず買う気になって来てもらうということなのですが、この点に関しては、今、国を挙げて取り組んでいる観光立国ですとか、東京オリンピックという風邪薬が効いています。買う気になって来てもらうために、一人でアピールしに行くのは大変なのですが、国を挙げて支援ができていますし、オリンピックということで、注目を集めている今が、やはりチャンスだと思います。逆に今を逃せば、買う気になって来てもらうための宣伝がものすごく大変になっていくのが、現状だと思うのですね。

東京オリンピックという風邪薬が効いている間に、この需要不足という風邪を治さなければいけない。今、ここで風邪薬が効いているからといって、遊んでいたら、薬が切れた後にどうなるかということは、この先言うまでもない話だと思います。

では、そのMICEを実施するには、何が必要なのでしょうか？イベントを誘致するのですから、イベント会場でしょうか？これは間違っていないのですが、これだけでは、50点というよりは30点ぐらいのところなのですね。会場は必要ですが、会場さえあれば誘致できるというのは大きな間違いです。田辺会頭の話にあったように、観光交流拠点が八王子にできていますが、これは一言でいうと、大きなイベントホールと多くの会議室のある建物です。MICEにとって重要なパーツではあるのですが、これがあれば、これができるから、ではMICEを始めるよというものではないですし、まして建物が出来上がればそれでもう終わりだというものではない。譬えるなら結婚式ですけれども、よほどの事情がない限り式場が取れたら、結婚式の内容はどうでもいいやという方は、まずめったにいないと思うのです。基本的に一番大事なものは、そこの式場を使うと、どんな式が挙げられるかという部分だと思うのですね。あとはご予算次第。MICEも同じで、そこのまちで開催すると、どんなイベントが開催できるのかということがとても大事になってきます。そこに予算ですとか、規模感といったものが加わって、開催地として選ばれるようになります。

こちらをご覧ください。MICEに必要なMICEに関わる産業を挙げたものです。上半分が行われるイベントを開催する目的になる産業で、下半分がイベントを開催する手段になる産業です。大学では学術会議が開かれます。医療関係では、特に医学部などでは、学術会議が参加分野ですし、医療に優れた企業なども八王子市内に多くありますので、それらの企業等がイベントや見本市などを開催するなどの需要が期待されます。



工業関係では、埼玉西部から神奈川南西部にかけて多くの技術力のある中小企業が集まっています。八王子がこのMICEの機能を持つことで、その中心としての存在感を発揮することができると思います。スポーツのイベントも、対戦相手というものが必要ですし、大会ともなれば選手、監督、家族、それに観客に応援団と、多くの来訪者が見込まれるイベントです。これらの会議やイベントが開催されて、大勢の来訪者が来れば、まず食事の手配、それから宿泊、それらの食事場所と宿泊場所と会場を結ぶ交通手段というものも必要になってきます。

ここまであれば、とりあえずイベントは開催できそうなのですけれども、観光とお土産という項目がまだ残っています。これらがそのまちで、どんなイベントが開催できるかという内容に重要になってきます。これが選ばれる差別化のポイントで、他の都市と違うものが提供できるかという大事な部分だと考えています。

では、ここから観光についての話を掘り下げていきたいと思います。八王子で観光と言って真っ先に思いつくものはなんでしょうか。大体の方は、ミシュランで三つ星の高尾山という方が多いと思います。別に他のものでもいいのですが、とりあえず高尾山で話を進めていきたいと思います。

ケーブルカーに乗って、薬王院に参拝して、いい眺めだなと景色を眺めて、情報の少ない中で、わけもわからず行ったら大体こんな感じに収まると思うのですけれども、高尾山の魅力ってこれだけでしたっけ？違いますよね。高尾山というのは、観光ではなくて、観光資源ですね、正しく言うと。観光そのものではない。その関係というのは、レストランでいうと、材料と料理の関係と同じです。よい材料があるからといって料理もせずに、どんと出して、さあ食べと言われても、よそから来た人には、食べ方がわかりませんということになります。高尾山ですと、とりあえずケーブルカーに乗ってというさっきのコースがありますので、刺身にはなっているのかもしれませんが、もっといろいろな楽しみ方、本当においしい食べ方、われわれこそが知っている食べ方というものがあったのでしょうか？

小学生でも登れる手軽な登山ルートから豊富な植生を見る。外国語で説明するガイドが欲しい。夜に登ってご来光を眺めてもいいかもしれません。薬王院でも精進料理を食べること

ができます。周囲の山々と尾根をつなぐハイキングコースもあります。あなたもキャストの一人として、こういういろいろなメニューをつくってほしいと思うのです。皆さんの知恵と知識とお手を拝借させていただきたいと思います。

そんなことを言われても、高尾山について詳しくないという方も大丈夫です。観光資源というのは、高尾山だけではないのです。必ずあなたが知っている、むしろあなたしか知らない観光資源というものがあるはずで、それはあなたの日常生活の中にあります。今、世の中では都市部の人や、外国の人が日本の農家の暮らしを体験したいとあって、農家民泊などという観光も生まれています。これは農家の人の日常の暮らしそのものなのです。北国では、雪おろし体験などという観光もできます。雪下ろしは雪国の人に言わせると、やっかいな作業以外の何物でもない、何でそんなことをしにくるのだという話なのでしょうが、それが無い暮らしの人から見れば、珍しい体験として観光資源になるのです。

そんなこと言われても、おれ農家ではないし、八王子では雪下ろししないよと、そういう話になるかと思えます。では、こんなのはどうでしょう。あなたの行きつけの飲み屋の案内。皆さんにとってどうってことはない、いつも行っている行きつけのお店。これが知らない人から見れば、地元の人しか知らない名店かもしれません。そのノリで、現に新宿のゴールデン街なんていう場所が、昔は本当に地元の人が行くような店だったのが、すっかり外国人観光客でいっぱいです。この間見に行ってみますと、どの扉にもドル換算の料金が書かれていたり、英語の表記がされていたりと、すっかり外国人観光客の町になっていました。

初めての人とはとりあえず観光ガイドブックに載っているお店に行くのですが、2度目3度目となると、そういうディープな世界を見てみたくなるものです。逆に言うと、そういうディープな世界がないと、2度3度と足を運んでもらえるまちなれないので、MICE という形で人を呼んで、そこでこういう八王子の深さを見てもらって、また、もっと深いところを見たくなくなったとあって、2度3度と足を運んでもらう。この循環を重ねることによって、安定した来訪者を受け入れて、それでこそ周りの景気の浮き沈みに振り回されない八王子になれると思うのです。

ぜひ、皆さんの知恵を、知識を、お手を拝借させていただきたいと思います。我々市民の手で、「新しい観光 MICE 都市八王子」をつくっていきましょう。私の話は以上です。皆さまご清聴ありがとうございました。

福井 インバウンドで観光客が来て、それでいろいろとものが売れていくということもありますが、やはり交流人口というのは、そこに何か、人と人との出会いの中で、一つの大きな触媒があって、変化が起きてくれるような、そういうクリエイティブなものを持たないといけないのではないかと思います。そういう意味では八王子にはいろいろな可能性があるのではないかと思います。

それでは、栗野先生に最後のリレートークをやっていただきます。よろしくお願いします。

栗野 東京造形大学の栗野と申します。いつもとりとめのない話をするのは得意なのですが、今日は、レジュメがあって順番どおり話さなければいけないと、かえって緊張してしまっています。今日は、佐々木先生の一言から急に「オペラ」が流行っていますけれども、確かに

co-operation という言葉の中にオペラという言葉があるのだなあということを、先ほど再認識いたしました。

本日は、芸術系大学がまちにある意味を、東京造形大学の社会連携事業の事例を通して表明したいと思えます。

東京造形大学は、今、この場所から南へ車で約 20 分、JR 横浜線の「南野」と「相原」の間ぐらにある里山の自然豊かな立地にあります。高尾の八王子城址近くにキャンパスがありましたところから 1992 年に移転をしまして、現在の宇津貫町というところに所在しております。

昨年度、開学 50 周年を迎えました。校舎は、1980 年代のポストモダンの建築の香りを残しておりますので、子どもたちが大好きな特撮ヒーローものなどには、秘密基地や悪の研究所といったものとして登場し、一部のマニアの方には憧れていただいております。

本学はデザインと美術を専門としておりますけれども、基本的には造形の単科大学であります。創設者は桑澤洋子先生です。桑澤葉子先生は、1930 年代、昭和 5 年のころから建築、室内設計、服飾などのデザインジャーナリズムの世界で活躍し、自身も服飾デザイナーとして、当時はまだ顧みられることの少なかった働く人たちのユニフォームや、家庭で働く主婦たちのための、機能的でありながらおしゃれ心も満たしてくれるような衣服のデザインをしておりました。

著書には、昭和 32 年に出版されました『普段着のデザイナー』という本などもあります。機能性や合理性を追求したデザイン活動を進める中で、デザインの総合的な基礎教育と専門教育の重要性を痛感して、1954 年（昭和 29）年に各界気鋭の教育者、芸術家、デザイナーたちの協力を得て、当時としては画期的なデザインの専門学校 桑沢デザイン研究所を青山に設立しました。

そしてさらに高度な造形教育を追求する場として 1966 年に東京造形大学をこの地八王子に設立し、学長・理事長に就任しました。このように、日本にまだデザインという言葉が根付いていない時代からいち早く日常に、社会の生活の中にデザインが必要だということを看破し、働く女性の先駆けという以上に猛烈な情熱で「日本にデザインの学校を！」と、それを成し遂げた桑澤葉子先生の建学の精神は、社会で機能するデザインに他なりません。

本学の造形という言葉には、デザイン・美術を広く社会の営みの中で捉える思想が込められており、本学が学外の団体と行う研究事業は、本学の造形活動において重要な位置を占めています。また、大学は社会における公益的な団体として、社会にその知的資源を積極的に還元することが求められています。本学は社会に開かれた大学として、産業界、教育機関、行政機関との多角的な連携による社会の進展に貢献することを目指しています。

こうした土台によりまして、本学では教育活動として社会との連携をはかっております。2016 年度からは八王子駅の南側にありますトリッキーという会社の場所をお借りして、万



栗野 由美氏

(よろず) 相談所として「八王子まちなかカレッジ」という事業も始めておりますので、何か一緒にやってみようかなとお考えの方は、ぜひお声掛けをしてください。

本学はものづくりの大学ですので、社会連携事業も調査から始まりますが、やはり最終的にはものの姿形を通して、ことを生み出すということになります。これから二つの地場産業との連携事業を紹介したいと思います。

一つ目は、テキスタイルデザイン専攻領域が富士吉田織物協同組合、山梨県富士工業技術センターと協力して取り組んでいる「富士山テキスタイルプロジェクト」です。2009年に始まったこのプロジェクトは、繊維産地が慢性的に抱えている閉塞感を打開したいと考える若手の職人たちからの申し出を受けて始まりました。数十社がこのプロジェクトに参加しております。これが単なるイベントに終わらず、実際に彼らの仕事に直結する成果を上げることを目標に取り組んでまいりました。やがて、これに参加した学生が現地の企業に入職するなどありまして、そういった人たちの意欲でもってファクトリーブランドが立ち上がり、今では、全国的な大ヒット商品なども生まれております。ご朱印やお守りを入れるものとして、ちょっとおしゃれなグッズショップなどに置かれ、ご覧になった方もあるのではないかと思います。

次に二つ目は、福島県会津若松市との連携で取り組んでおります「会津プロジェクト」です。これは大学院の造形プロジェクトとして2010年のリサーチから始まっておりまして、東日本大震災を経て今日に至るまで、あるときはアートプロジェクト、あるときはデザインプロジェクトと展開をし、地域に暮らす人々や伝統工芸職人の方々と交流しながら続けております。地場産品魅力向上アートイベントとして、会津木綿や会津塗などの製品開発を実際に職人さんと若いデザイナーの学生たちと協働して行い、製品化したものを広報するという活動にも力を入れております。

続きまして、八王子市に関連する事業にも長くお付き合いいただいている事業がいくつかありますので、こちらをご紹介します。私自身もこういったものに参加することによって、八王子市についてドメスティック観光といいますか、先ほど自らが観光を開発せよというお話がありましたけれども、ずいぶん観光させていただいたように思います。

「Hachioji 影絵プロジェクト」は2007年に始まり、今年で10年目を迎えます。これは江戸時代に興った伝統芸能である「写し絵」を研究対象としておりまして、初年度は八王子市郷土資料館に保存されておりました「風呂」という、写し絵で使う幻灯機を実際に採寸して復元をするということから始めました。その実績をもとに、像が写る、動くという原初的な映像の不思議を体験し、伝統的な手法を用いながらも現代的な解釈を取り入れたオリジナル作品を制作、上演をするということを主体に、多数のワークショップも展開しています。

「フラッグ・デザイン・ギャラリー」は、2003年から始まっておりますので、既に14年経っております。ちょうど昨日から、北口ユーロードから甲州街道にかけてのところにフラッグが掲出されております。今日、駅からこちらにいらっしゃった方も、あれ、なにか緑っぽいフラッグがたくさん掛かっているなどお気づきの方もあったかと思えます。お気づきでなかった方はお帰りの際、ぜひご覧になってください。

そして私が東京造形大学に入職しまして、一番最初に取り組みました社会連携事業がこちらでした。2003年、4年というころには、ただ美大があるから美大生が絵を描いたものでま

ちを賑やかにしてほしいなというところから始まったイベントでした。わたしには、もっとまちに入り込みたいなという思いがありましたので、これを大学院生たちとのプロジェクトとしまして、学内のコンペを通して、7月に数千人が集まってきますオープンキャンパスというイベントのときに、来場者の高校生たちに好きなものに投票をしてもらおうということをし、審査員の先生方とその高校生の感性を併せたものから選出をするということを行いました。



それから八王子の布印刷をしてくださる企業さんとの協力により、フラッグができあがりましたら、ユーロードの先には夢美術館がありますので、夢美術館までぜひ足を延ばしていただき、美術館があるまちを楽しんでいただこうと、夢美術館にもご協力をいただいて、フラッグの原画展を開催しております。今回もこのフラッグ・デザイン・ギャラリーは11月5日まで開催をしております、この期間中、夢美術館の中で気に入った原画に投票をすることができます。

多くの市民の皆さんから投票していただくと、学生たちのエネルギーになります。このイベントは、市民が選ぶグランプリということで、専門家の先生が選ぶものではなく、市民がこの景観の中で、いいなと思えるものを選んでもらえる、これが学生にとってどれだけ誇りになることでしょうか。皆さんも育てゲームではないですけども、おれが投票した学生がみんなの注目を集めているぞという気持ちを楽しみながら、ぜひ参加していただきたいと思います。

そしてこのイベントが終わった後には、大学にフラッグを持ち帰り、学校で再度校舎の壁に掲出します。これによって学生たちもああやってきたな、凱旋というような感慨を得るわけです。このプロジェクトの立ち上げと言いますか、土台をつくることを通してずいぶんと八王子のみなさん達にお世話になりましたし、仲良くなることもできました。これが現在も引き継がれていることをうれしく思います。

私が八王子とどんなことをやったのかなというものを書き出してみたのですが、1ページに書こうと思ったら小さな字になってしまいました。本当にいろいろな経験をさせていただきました。少し端折りながら紹介だけさせていただきます。

今年から始まったプロジェクトとしましては、「地域生活支援活動 PR 動画プロジェクト」というものがあります。これは地域で活動をなさっている自治体や NPO のみなさんの活動をもっとわかりやすく見える化しようと、動画をつくっていくものであります。ふたつの方向性があり、一つは高齢者が高齢者を支えているという現状に、もっと地域の若い世代に入ってもらいたいということで、若い人に見てもらえるような動画をつくろうというプロジェクトも行っております。

それから「八王子医療刑務所プロジェクト」といまして、こちらは壁面に壁画を描いていくということなのですが、市民のみなさんたちと一緒に1年間を通していろいろなイベントをしながら絵を決めていき、みんなで完成させました。いずれこれは取り壊されて、新しい施設になるということなのですが、その時までの思い出にと思っています。

最後に、「市制100周年八王子学生CMコンテスト」で、昨年度グランプリを受賞した作品をお見せします。中学生の人たちはこういう絵は好きですか？これは大学生のお姉さんたちが、八王子では高尾山ばかりが知られているけれども、八王子には8つの山があるのだよということで、観光資源として八王子の山それぞれにもっと人に来てもらおうと、それぞれの山を擬人化しました。この擬人化された人たちがツイッターやフェイスブックなどのSNSを通して八王子の観光大使としていろいろな日常を紹介していく、そしてやがては人気投票を行って、アイドルのセンターを競い合っってコンサートをするという野望があります。

せっかくなので、15秒だけですけれども2本のCMをご覧くださいと思います。

このようにわたしどもではやっておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



福井 佐々木先生、ソーシャルデザイン、ソーシャルプロデュースの時代の今、造形大学の役割もありますよね。

佐々木 今、もっとも大学の中で元気なのは芸術系大学ですね。特に、地域社会と連携していると、学生たちがそこで面白いことと出会っていますね。それで、最後に言われた医療刑務所など、普段はアートと無関係だと思われるところで、アートと福祉や障害者とが結びついてきています。これを社会包摂型アートというのですが、文化庁ではこれからそこに焦点を当てていきます。ですからぜひ続けてください。よろしくお願いいたします。

福井 どうもありがとうございました。本当に全部基調講演のような形でもっとお話を聞きたいなというものでした。これをきっかけにいろいろなところでプレゼンテーションしていただきたいし、今日集まった4人のパネリストは各界の産業界の代表でございますので、お互いに連携していただきたいと思います。

本当は会場のみなさんから質問をいただきたかったのですが、時間が押してまいりました。八王子の交流創造に関連するポテンシャルはすごいなということが、会場のみなさんにもおわかりいただけたと思います。これから、パネリストの皆さんがお考えになる、何が一番大事なのか、どこが交流創造を実現するのに一番のキーになるのかを、キーワードとして書いていただいて、それぞれ3分ぐらいずつ発表をお願いします。中学生のみなさんも思ったことを書いてください。佐々木先生には、みなさんの発表を聞いて、最後に発表していただきます。

では、古瀬さんから、キーワードを皆さんに見せていただきながら、発表をお願いします。

古瀬 キーワードは「貢献」という言葉です。今までの話とちょっと違った観点から捉えましたが、ものやサービスをつくっていくときには、これは誰のためにつくっていくのか、誰の役に立つのだろうと考えなければいけないと思います。

それからいろいろな仕事をしていると、いやなことやつまらないことがいっぱいあるので、でもそれをどう乗り越えていくかということを考えると、なんのためにそういうことをするのだろうというときに、自分がやっていて楽しいからやるという、では楽しくないことはやらないのですかという話になるのです。また、誰かに認めてもらうためにやるのだと考えると、では誰も見ていなかったら手を抜くのですか、という話になります。

そうではなくて、これは誰かがこれを利用するのだと、それによって誰かのためになるのだという利他的な考え方を、やはり創造の源のところにもっていれば、たとえいやなことであっても、誰が見ていなくても、きちんとやり遂げなければいけないことだと実行できる。そういう誰かの役に立つ、役に立っているのだという気持ちが、自分自身を下支えする力になっていくと思います。今日のお話を別の観点からみて「貢献」という言葉を皆さんに贈りたいと思います。

福井 「貢献」は日本語ですが、今、CSR や CSV などいろいろな形で海外の経営思想が出てきていますね。「貢献」が、日本の企業活動の原点にあるような話が最近多いですね。どうもありがとうございました。

では、栗野先生、お願いします。

栗野 私は「日常の満足」という言葉を挙げたいと思います。今日、お話くださいました先生方皆さんのお話の中にすべてヒントがあったと思うのですが、周りにどうにかしてもらおうというのではなく、自分が楽しめるような感性を開いていこうということです。キーワードとしては「気付き」ということもあるかと思います。日常の何気ないことを満足できるような、そんな自分になる、発見をする毎日を送っていくことで、この場所が好きな人が集まっている場所であれば、きっと外から来る人も好きになると思います。ポジティブなエネルギーが生まれるものとして「日常の満足」という言葉を挙げたいと思います。

福井 「日常の満足」の創造ですか？共有ですか？

栗野 自分自身が日常に満足するということですね。今日のごはんは美味しかったとか、そういうことです。

北原 私は「前へ進む」です。中学生のみなさんは、きっとなんのために生きるのかなと考えることもあると思います。昨日、リハビリの担当者と話したのですけれども、認知症予防に、意外に男の方にもうれしいのが、生け花です。でもどうせ花は枯れますよね。だけど、そこで何かをやることによって一步前に進める。いろいろなポテンシャルがみんなにあるのは分かっているのだから、とにかく人と手を取り合って一步前に進みましょう。

福井 佐藤さん、どうぞ。

佐藤 「市民参加による観光推進」です。わたしも同じような話になってしまうのですが、この話で一番大事なものは、市民参加の部分にあると思っていますのですね。今までの観光というと、やっぱり他力本願で、外から八王子を見て八王子を紹介してくれてという形でした。それで高尾山が注目を集めやすいところだったのですが、これからは着地型と呼ばれる、着地型観光という言葉はずいぶん前から言われていますが、それはやはり市民一人一人の中から生まれてくるもので、皆が八王子をよくして、こんないまちだから見てほしいという気持ちをもってやっていくことで、八王子の力をつけていく形につながられればと考えています。

福井 はい、どうもありがとうございました。七中の3人にも発表していただきます。

前原 今回のみなさんの意見を聞いて、人工知能や観光の仕方の視点を変えてみようなど、新しい視点が必要なのかなと思いました。「より新しい街へ」という言葉が自分の中に出てきました。これからは僕たちが担っていく八王子で、今日聞いた意見をこれからは活かしていきたいようにしていきたいなど、今回を通して思いました。

伊藤 キーワードは「明るいまちづくり」です。私は今回のみなさんのお話を聞いて、充実した毎日を送ることや八王子市のアピールをすること、明るい笑顔などが、すごく大切なのではないかと思います。今、少子高齢化などいろいろ問題点があると思うのですが、それをどうやって改善していくかも、自分の中でしっかり考えて行動に移していけたらいいなと思います。

萩野 私は「八王子のアピール」ということで、八王子には豊かな自然のほか、たくさんのイベントやすばらしい学校や病院などがあるので、みんなに八王子のアピールをして、どんどん八王子という考えを広げていくことが大切だと思いました。皆さんのお話を聞いて、もっと八王子をよいまちにしていけたらと思ったので、これからそのような行動をしていきたいと思います。今日はありがとうございました。

福井 3人とも自分たちで考えて発表したことと、4人の産業界のリーダーが発表したことを聞いて、ちょっと元気になったというか、八王子やるじゃんとか、そんな感じが持てましたか？大人たち、リーダーもがんばらないといけないですね。それでは佐々木先生どうですか、今までの流れ全体に対してコメントをいただけますか？

佐々木 僕は「〇」です。ちょっといびつな〇になりましたが。

こういう場所というのは、とても大事だと思うのですが、できれば段の上と下ではなくて、同じフラットなところで、ラウンドテーブル会議をやるといいですよ。それを実は金沢は、20年くらい続けています。市長さんも一人の市民として加わって、商工会議所のリーダーも加わる、それからアーティストも加わる。金沢では若い人は入れていないけれども、入れた方がいいのかもしれない。それを続けると、具体的なアイデアが生まれて、創造の渦が起きます。場がつながって行って渦が起きてきたら創造都市に近づくので、この次はもう少しフラットな場所で、この話の続きができるといいなと思います。そういったことを商工会議所が音頭をとるのか、あるいは行政なのか、あるいは両方なのかわかりませんが、ぜひ考えていただきたいと思います。今日は、どうもありがとうございます。

福井 長時間、みなさんにご参加いただきました。やはり八王子の持っている多様なポテンシャルを、冒頭、会頭が再認識をする時代ではないかとおっしゃいましたが、そういう資源をどうやって再認識していくのかというときに、やはり産官学市民の連携が大事だなと思いますね。そのときに、今、佐々木先生がおっしゃったようにフラットな形で、こういう凹凸のある場所ではなく、本当にフラットな場でそれが進められていくことが大事なのではないかと思います。

今回のビジョンフォーラムでは、中学生のみなさんにいろいろなテーマでワークショップをやっていただきました。中には3時限続けて、その後のフォローアップの会議も進めていただいたりしたのですね。そういった意味で、新しい市民交流、あるいは一人一人の市民の

豊かさをつくっていく、そういう八王子のこれからの在り方というものに、少しでも道筋をつけられるといいのではないかと思います。

私がまとめることではありませんので、今日、出てきたお話を皆さんの方で引き取っていただき、できるだけ多様な対話と交流の場をつくっていただきたい。その対話と交流から新しいクリエイティブな発想が生まれるのだと思います。そして一人一人の豊かな生活が実現されていく、そういう循環としては八王子がどこよりもいいぞといった、「八王子のアピール」とありましたけれども、ぜひ全員が進めていくステップになっていくといいのではないかと思います。以上で、パネルディスカッションを終了します。



福井 昌平氏

閉会セレモニー

フォトセッション&フラッグリレー



市制 100 周年記念事業として、生活文化創造都市の思いが詰まった 100 周年記念フラッグを八王子市立第七中学校の生徒のみなさんに、八王子商工会議所の田辺会頭から贈呈した。

このフラッグは、平成 30 年 2 月まで全 8 回にわたり開催されるビジョンフォーラムの会場をリレー形式で巡回し、毎回展示される。

生活文化創造都市フォーラム エクスカーション

花とみどりの八王子巡り

開催日：平成29年10月6日（金）

行程：

視察先	概要
1. 西放射線ユーロード～中町黒堀	JR八王子駅北口から八日町方面に向かう歩行者専用の道「西放射線ユーロード」。たくさんの店が建ち並び、多くの買い物客や学生たちで賑わっている。緑化フェアのイベントとして行われているオープンカフェ「花カフェゾーン」などを訪れる。続いて、前日の「オープニングスピーチ」で田辺会頭から紹介のあった「中町」を訪れ、黒堀を視察
2. 「第34回全国都市緑化はちおうじフェア」メイン会場（富士森公園）	テーマごとに趣向を凝らした数々のガーデンが広がる中、食やガーデニング、アウトドアスポーツをはじめとする様々な楽しみや学びが体験できる「参加体験型」フェアを体感する
3. 高尾登山電鉄 清滝駅	ミシュラン三ツ星の高尾山。ふもとから中腹を往復するケーブルカーは、最急勾配が31度18分。ケーブルカーの線路では日本一の急勾配。緑化フェア期間中は、ふもとの「清滝駅」までモザイクカルチャーが展示される
4. うかい鳥山	奥高尾の豊かな自然が風情を醸し出す、いろり炭火焼料理を堪能できる料亭。日本建築の美しい佇まいに心とまされ、窓の外に広がる日本庭園の景観に安らぎを感じ、香ばしく焼き上げるいろり炭火焼の至福の味わいに酔いしれる昼食を味わう
5. 日野オートプラザ	実物の車両や数多くの写真、説明パネルなどを通して、トラック・バスの製造で知られる日野自動車の技術開発の歴史を紹介する展示館。ダカールラリーに参戦し完走した中型トラック「日野レンジャー」や懐かしのボンネットトラックが展示されている
6. オリンパス技術歴史館「瑞古洞」	カメラやオーディオでおなじみのオリンパスが運営する企業資料館。「ライフサイエンス産業事業」「映像事業」「医療事業」の分野ごと、オリンパスの創業時から現在にいたるまでの製品を展示し、技術的変遷や発展、また製品がどのように社会の発展に貢献してきたかを紹介している

1. 西放射線ユーロード～中町黒塀

<西放射線ユーロード>

八王子駅北口の西放射線ユーロードは、北口バスロータリーの西端、東急スクエアビル前の交差点から、甲州街道（国道 20 号）と国道 16 号が交差する八日町交差点まで続く歩行者と自転車専用の道路。小さな 3 つの公園を併合し、各種イベントの開催場所として利用されている。

<中町界隈>

大正から戦後まもなくまで八王子は織物の街として繁栄し、中町界隈に多摩地域で唯一の花街ができ、賑わいを見せていた。現在も、ユーロードから 5 分ほど歩いた中町公園周辺の路地に入ったところに、花街の賑わいと江戸の情緒を今に伝える黒塀が残っている。この花街の風情を残そうと、有志が「黒塀を楽しむ会」を結成し、柳の植樹運動などを展開している。



ユーロードにつくられたオープンカフェ



中町の黒塀界隈



2. 「第 34 回 全国都市緑化はちおうじフェア」メイン会場(富士森公園)

<「第 34 回全国都市緑化はちおうじフェア」の開催概要>

- ◆開催期間 2017年9月16日(土)～10月15日(日)
- ◆コンセプト 花とみどり溢れる文化的なライフスタイルの体験
- ◆メイン会場 富士森公園(八王子市台町2-2)
- ◆サテライト会場 市内6地域に展開
 - 中央エリア(西放射線ユーロード)
 - 北エリア(道の駅八王子滝山)
 - 西エリア(夕やけ小やけふれあいの里)
 - 西南エリア(南浅川・高尾登山電鉄清滝駅前)
 - 東南エリア(片倉つどいの森公園)
 - 東エリア(南大沢駅前・由木地区)

<メイン会場 富士森公園>

「八王子千人同心花壇」「八王子100周年アーカイブガーデン」「スタジアムアートガーデン」「八王子学生出展ガーデン」「八王子ガーデンレストラン・マルシェ」など、テーマごとに趣向を凝らした数々のガーデンが広がる。



3. 高尾登山電鉄 清滝駅～ TAKAO599MUSEUM

<高尾登山電鉄 清滝駅>

高尾山のふもとから中腹を往復するケーブルカーの入口。緑化フェアのサテライト会場の一つとして駅前でモザイカルチャーを展開。



<TAKAO599MUSEUM>

高尾山の豊かな生態系への好奇心を促し、高尾山の魅力を次世代まで伝えることを目的に、観光・学習・交流機能を備えた施設として開設された。599は高尾山の標高。



4. うかい鳥山

<「うかい鳥山」の概要>

1964（昭和 39）年開業の八王子を代表する名店。美しい高尾山の山あい、日本の原風景を彷彿させるうかいグループの創業店。6000 坪の広大な敷地に、越中五箇山より移築した合掌造りや数寄屋造りの離れ座敷など、日本の伝統建築の粋が緑の中に配されている。四季折々の庭園を眺めながら、いろり炭火焼と山里の恵みを味わうことができる。

八王子市市制 100 周年を記念して、「八王子婚」を実施中。色打掛を無料でレンタルしている。最近、「和」の婚礼に憧れる方も多く、奥の庭からフロントの辺りまで、白無垢を着た花嫁さんと新郎、ご両親らで花嫁行列を行っている。



5. 日野オートプラザ／6.オリンパス技術歴史館「瑞古洞」

<日野オートプラザ>

日野自動車の「ものを運ぶ」というクルマづくりの歴史を振り返るとともに、実物の車両や数多くの写真などを通して、トラックやバスの製造で知られる日野自動車の「はつもの」に挑戦し続ける技術開発の歴史を見ることができる企業博物館。



<オリンパス技術歴史館「瑞古洞」>

オリンパスが世に送り出した創業時から現在に至るまでの製品を展示し、技術的変遷や発展、オリンパスの製品がどのように社会に貢献してきたかがわかる。「瑞古洞」は、同社が開発した最初のカメラ用レンズ ZUIKO（瑞光）に由来し、古くからの製品を集めた洞穴をイメージして名付けられた。



八王子市市制 100 周年記念事業「生活文化創造都市フォーラム」
“生活文化創造都市推進事業” 八王子地域会議 実施報告書

2018年3月発行

編集・発行 一般財団法人 日本ファッション協会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-5-1
神保町須賀ビル7階
TEL 03-3295-1311 FAX 03-3295-3295

